

## 幼稚園における室内環境の変遷 —室内装飾, 壁面に着目して—

The Change of the Interior Surrounding in the Kindergarten  
—On the Decoration of the room and Wall —

福田 篤子  
Atsuko Fukuda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：幼稚園, 室内環境, 室内装飾, 壁面

Key words : Kindergarten, Interior Surrounding, Interior decoration, Decoration of the wall

### 1. 問題の所在

現在の幼稚園教育要領(2008), 第1章総則では、「幼児期における教育は, (中略) 幼児期の特性を踏まえ, 環境を通して行うものであることを基本とする」<sup>1)</sup>と示されている。環境とは幼児を取り巻くすべてのものだと言える。しかし, 昭和55年保育とカリキュラム10月号の特集「保育環境の工夫」の中で, 高杉自子は「壁面構成が環境構成とと思っている人がいる。そういう考えが長く続いている」<sup>2)</sup>といいそのあり方に苦言を呈している。実際, 保育実践を行ってきた中で「壁面」についてなぜ作っているか, 環境構成としてどのように捉えているかということを考えず, その内容だけを考え作成してきた。本来, 室内環境を整えることは, 壁面を変えるということではないが, 現在の課題として, このように環境を整える中心に壁面を作るという現実が存在している。

### 2. 先行研究の検討

先行研究を検討した結果, 壁面は保育の中で必須スキルとして, また必須アイテムとして着目され多様な研究がなされている。さらに, 壁面には一定の効果があるとされ, 病院, 小学校図書館など保育で取り組んできた環境を保育以外の環境で取り入れようという動きも見て取れる。歴史的な観点からいうと, 明治期, 大正期という限定された期間の様子が分かっているが, 大正期以降の様子が分かる研究は存在していない。

重要で効果的なものであることが分かっているが, その原点や現在までの変遷は解明されていない。

い。

### 3. 目的

本研究では室内環境の室内装飾と壁面の歴史を振り返ることにより, 現在そしてこれからの室内環境としての室内装飾と壁面の在り方を検討していくこととする。そこで, 室内環境がどのように変化してきたかを明示するために, 時代毎の特徴を示し, その特徴がどのように変遷して今日の室内環境に至ったかを明示していくことを目的とする。

### 4. 本研究における定義

- (1) 室内環境とは: 「保育室(開誘室)」, 「遊戯室(ホール)」, 「縦覧室」とする。廊下, 玄関ホール, トイレ等は含まない。
- (2) 室内装飾とは: 壁面(壁の面), 床面, 空間, 天井, 窓, 黒板, 掲示板, 棚などの上を美しく飾ること, またはその飾りそのもののことを言う。
- (3) 壁面とは: 室内の壁や掲示板や黒板などの広い画面を利用して構成された, 子どもや保育者の絵や作品とする。

### 5. 研究方法

- (1) 対象園の選定
  - ① 明治9年設立の国立T幼稚園(日本で最初に設立され, 各園の模範となった園である)
  - ② 明治25年設立の公立(当時)O幼稚園(T幼稚園を模範とし, 全国で2番目に設立され全

国の模範的な幼稚園を目指した園が前身である)

- ③ 明治 34 年設立の私立 A 幼稚園 (T 幼稚園に範をとり、子守学校がその前身で、仏教寺院関係者が設立した)

上記 3 園とした。設立の背景や地域の異なる園の室内装飾と壁面の変遷を見ることで、日本の幼稚園の室内装飾と壁面の変遷の全体像の解明により近づくと考えている。

## (2) 調査日と収集枚数・アイテム件数

3 園合計：写真枚数 357 枚、対象アイテム 897 個

### ① T 幼稚園

調査日：2015 年 11 月 7 日

収集写真枚数 9 枚 対象アイテム 23 個

### ② O 幼稚園

調査日：2015 年 2 月 27 日、2015 年 4 月 17 日、  
2015 年 7 月 16 日

収集写真枚数 319 枚 対象アイテム 785 個

### ③ A 幼稚園

調査日：2015 年 2015 年 6 月 18 日

収集写真枚数 29 枚 対象アイテム 89 個

## (3) 分析の方法

### ① 対象の選定

記念誌、卒園アルバム、写真の中から、対象アイテム 1 つずつに対して、写真撮影時期、掲示場所、掲示方法と内容、素材、作成者、作成方法、読み取れることの 7 つの項目について丁寧に読みといていく。

### ② 分析枠組みの作成

先行研究を検討した結果、本研究に使える適切な分析枠組みが存在していないことが分かった。よって、対象の選定より導き出した 129 個のアイテムより、本研究における独自のカテゴリーを生成し分析枠組みを作成した。

### ③ 分析の手順

選定した写真より、生成したカテゴリーと年別にカウントしていく。次に対象園ごとに年毎の分析を実施し特徴を見出す。そして時代区分ごとに分析して、特徴を見出す。最後に、量から導きだされた結果だけでは捉えることのできない質的変容について、時代ごとに特徴的なカテゴリーと、カテゴリーごとの変遷について分析をしていく。

## 6. 結果

量的分析結果と質的分析結果のまとめると次のようなことが見えてきた。

- I. 明治期から大正期：装飾を意識し、掛図や絵から直接的、間接的に指導するための室内環境作りを意識した。
- II. 昭和初期から戦前：壁面の始まりと幼児の作品を取り入れた室内環境づくりを意識した。
- III. 戦後から現在：生活を重視した体験主義の表現を壁面に取り入れた室内環境づくりを意識した。
- IV. 壁面は小学校の影響と幼稚園の独自性で生まれた。

## 7. まとめ

明治期、大正期の絵や写真を飾っていたころ、知識の伝達が大きな目的であったことは言うまでもないが、もう一つ、心を豊かにする、趣味の養成を願っていたことが分かった。絵や写真に限らず、室内を装飾するというにもそういった意図があることを考慮して装飾をしていく必要があるだろう。

また壁面には体験したことを保育者や仲間と共に話しあい、幼児と保育者でともに楽しみながら保育室を皆で協力し一緒に作り上げていけるような環境になりえることも分かった。幼児と保育者が一緒に作り上げていく活動の一つとして、壁面を取り入れていくとよいのではないだろうか。

## 8. 今後の課題

明治期、大正期の写真の枚数が少なかった。また、昭和 18 年から昭和 24 年までの室内の写真が手に入らなかった。昭和 25 年より、室内環境の様子が大きく変わっていると感じた。戦争で休園になる園も多く、日常の保育の写真が残っている可能性は低いが、変動期と考えられるだけに、全体像を読み解くうえでこの時期のデータを探ることが必須であることはいうまでもない。

## 引用文献

- [1] 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説、フレーベル館、P23
- [2] 保育とカリキュラム 10 月号 (1980) 「保育環境の工夫」、ひかりのくに、P14-21

# 運動習慣のない若年女性における骨格筋内脂肪の意義に関する研究

Significance of Intramuscular lipid in sedentary young female

中田 千聡

Chisato Nakada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養専修

キーワード：骨格筋内脂肪，身体活動，酸化ストレス

Key words : Intramuscular, Physical activity, Oxygen stress

## 1. 目的

若年女性の極端な痩せ志向・願望は強く、低体重または普通体重にもかかわらず、体脂肪率が高い、いわゆる「かくれ肥満」が増加している。20歳代女性の運動習慣者の割合は最も低い状況あることや歩数の減少も見られることから、かくれ肥満増加の原因には、日常の身体活動量の低下が考えられ、骨格筋量や機能の低下につながるものと考えられる。このような若年女性において、内臓脂肪や皮下脂肪の顕著な蓄積は認められないことから、異所性脂肪の蓄積が考えられる。骨格筋における異所性脂肪は骨格筋内脂肪と呼ばれ、筋細胞内に脂肪滴として存在する筋細胞内脂肪

(IMCL)と筋線維間に脂肪細胞として存在する筋細胞外脂肪(EMCL)の2つに分けられるが、どちらも様々な健康障害に繋がることが指摘されている。しかし、2型糖尿病患者などの疾病を有する者、中高年者、運動鍛錬者を対象とした研究は行われているが、運動習慣のない若年女性を対象とした研究はほとんどない。

骨格筋機能測定に関しては、近年、近赤外線分光装置(near-infrared spectroscopy: NIRS)を用いた研究が行われており、脳内酸素代謝や骨格筋の酸素動態の測定を中心にスポーツ医学や臨床の分野で応用されている。しかし、運動習慣のない若年女性における筋局所有酸素機能の評価は実施されていない。またこれまでに、骨格筋内脂肪とNIRSによる筋局所有酸素機能との関連性についての検討はなされておらず、骨格筋内脂肪蓄積によって筋局所有酸素機能が低下するかどうかは分かってない。

そこで本研究は、運動習慣のない健常な若年女

性における骨格筋内脂肪の意義に関する研究を行った。まず、運動習慣のない若年女性に骨格筋内脂肪蓄積が認められるかについて基礎検討を行った。次に、筋局所有酸素機能の評価方法に関する基礎検討を行った。これらを踏まえて、骨格筋内脂肪蓄積を促進する要因についての検討、骨格筋内脂肪蓄積が健康障害や筋局所有酸素機能に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、詳細な検討を行った。

## 2. 方法

第一章では、運動習慣のない若年女性16名(21.0±0.6歳, BMI 19.8±1.5kg/m<sup>2</sup>)を対象に、核磁気共鳴分光法(<sup>1</sup>H-MRS法)を用いて、前脛骨筋(TA)、ヒラメ筋(SOL)、腓腹筋内側頭(MG)のIMCLおよびEMCLを測定し、骨格筋内脂肪量と分布に関する基礎的検討を行った。

第二章では、NIRS(浜松ホトニクスNIRO-200)を用いて、運動習慣のない若年女性における筋局所有酸素機能の評価方法に関する検討を行った。被験筋は、右脚下腿部のTAとし、座位にて体重の4%の重りを持ち上げる足背屈運動を行い、運動初期の組織酸素飽和度(TOI)低下率と運動終了後のTOI再酸素化時間(T1/2)を評価した。

第三章では、BMI 22 kg/m<sup>2</sup>以下の運動習慣のない若年女性36名(20.8±0.8歳, BMI 19.6±1.1 kg/m<sup>2</sup>)を対象に、骨格筋内脂肪、体組成および脚筋力測定、3軸加速度計を用いた身体活動量調査、簡易型自記式食事歴質問票(BDHQ)による食事調査を行った。TAのIMCLおよびEMCLの低値群、中値群、高値群の3群に分けて、骨格筋内脂肪蓄積の促進要因について検討を行った。

第四章では、骨格筋内脂肪蓄積が健康障害や筋局所有酸素機能に及ぼす影響を明らかにするために、第三章で得られた IMCL, EMCL と尿中酸化ストレスマーカー (8-OHdG, HEL), 筋局所有酸素機能との関係について検討を行った。

MRI 測定時の注意事項として、測定前日から測定直前まで、運動や高脂肪食を避け、普段どおりの生活を行うように指示した。

第二章～第四章における検査は、平成 25 年 9 月 30 日から 12 月 20 日の期間に実施した。測定項目への影響を考慮し、月経周期卵胞期の月経開始から 7～12 日間の間に行った。

### 3. 結果と考察

#### ・第一章

IMCL では、TA と MG に比べ SOL に多く存在していた ( $p<0.01$ )。また EMCL は、TA に比べ SOL と MG に多く存在していた (SOL vs. TA :  $p<0.01$ , MG vs. TA :  $p<0.01$ )。IMCL は、同条件で測定した閉経後中高年女性と同程度蓄積が認められ、EMCL は閉経後中高年女性に比較し有意に少なかった ( $p<0.01$ )。以上より、運動習慣のない若年女性で骨格筋内脂肪の蓄積が認められ、EMCL は、加齢により増加するものと推察された。

#### ・第二章

NIRS により運動時の TA の筋局所酸素動態を測定したところ、各被験者における運動開始 5 秒から 15 秒の間で認められる最も大きい TOI 低下率 ( $3.6\pm 1.0\% \cdot \text{sec}^{-1}$ ) が、週あたりの 4METs 以上の身体活動量と有意な正の相関 ( $p<0.05$ )、週あたりの 3METs 以上の身体活動量と正の相関傾向 ( $p=0.06$ ) を示したことから、この値を筋局所有酸素機能の指標とした。T1/2 も頻用される指標であるが、今回運動負荷として採用した低強度の負荷では筋局所有酸素機能の指標として適さないと推察された。

#### ・第三章

IMCL と体組成、脚筋力、身体活動量との間に関連性は見られなかった。一方で EMCL と体組成、脚筋力との間に関連性は認められなかったが、身体活動量については、EMCL 中値群、高値群が低値群に比べて週あたりの 4METs 以上の身体活動量が少ない傾向が認められた (中値群 vs. 低値群 :  $p=0.06$ , 高値群 vs. 低値群 :  $p=0.07$ )。すなわち、

中強度以上の身体活動量が少ないことが、若年女性の EMCL 蓄積の促進要因である可能性が示唆された。

#### ・第四章

IMCL は、いずれの酸化ストレスマーカーとも関連を示さなかった。一方 EMCL に関しては、尿中 8-OHdG が、EMCL 高値群で低値群に比べて高い値 ( $p<0.05$ ) を示した。HEL は、EMCL 高値群が中値群に比べて高い傾向 ( $p=0.05$ ) を示した。すなわち、EMCL が過剰に蓄積することによって、酸化ストレスを亢進させる可能性が推察された。また EMCL, IMCL のいずれも、TOI 低下率とは関連を示さず、今回認められた程度の IMCL および EMCL であれば、骨格筋内脂肪蓄積は、筋局所有酸素機能に影響を与えないものと推察された。

### 4. まとめと今後の課題

本研究では、運動習慣のない健常な若年女性に骨格筋内脂肪蓄積が認められることが確認された。そこで、骨格筋内脂肪の促進要因、健康障害に及ぼす影響について検討したところ、運動習慣のない若年女性における EMCL は、中強度以上の身体活動量が少ないことで蓄積が促進され、過剰に蓄積することで健康障害や疾病発症と関連の深い酸化ストレスを亢進させる可能性が示唆された。一方の IMCL では、すべての項目において関連が認められなかったことから、運動習慣のない健常な若年女性においては、IMCL より EMCL 蓄積を抑制することが健康維持のために重要であることが推察された。

第二章において、本研究で用いた軽度の運動負荷を用いたプロトコールでは、頻用される指標である T1/2 が筋有酸素機能を反映しない可能性が示された。第三章において、骨格筋内脂肪蓄積には体組成や脚筋力は関与していないことが示唆された。今後は、運動習慣のない者や有疾患者でも行える負担の少ない負荷量を用いた測定方法の検討を行うこと、対象者の体組成の選択範囲を広げて検討を行うこと、局所の脚筋力測定に関する検討を行い、筋力と骨格筋内脂肪や筋局所有酸素機能を同一部位で比較を行うなどして、骨格筋内脂肪蓄積の要因を詳細に検討すること、EMCL 蓄積がどのような機序で酸化ストレスを引き起こすのかについてさらに詳細な検討を行うことが課題であると考えられる。



# 1950年代の英文学に見られる労働者像 — Alan Sillitoe と John Braine を中心として —

British Working Class in 1950s  
— On Alan Sillitoe and John Braine —

松岡 美香  
Mika Matsuoka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修

キーワード：労働者階級，階級意識，共同体意識

Key words：Working class, Class consciousness, Community consciousness

## 序章

イギリスには階級制度が今も残っている。2000年5月、ローラ・スペンス (Laura Spence) という英国北部出身の18歳の女子高校生が、オックスフォード大学 (Oxford University) を受験したが、不合格となった。当時彼女が通っていた高校の校長はマスコミに、不合格の原因は彼女の出身地ではないのかと訴えた。また当時の財務大臣ゴードン・ブラウン (Gordon Brown) もこの件に言及し、オックスフォード大学が未だに、階級を気にするエリート気質を持っていると批判し、「ローラ・スペンス事件」として世間を騒がせた。

現在のイギリスは、階級の判別方法が定まっていないため、自身の所属階級を知ることが困難となっている。また人に所属階級を問うことはタブーとなっている。そこでBBCは所属階級が分かるテストを実施した。そして従来の3区分—上流階級、中流階級、労働者階級—を7区分—エリート階級、中流階級、技術系中流階級、新興労働者階級、労働者階級、新興ホワイトカラー階級、日雇い労働者階級—に細分化された。

以上のことから、現在でもイギリスには階級制度が少なからず存在していると言える。本研究では労働者階級に焦点をあて、20世紀前半から中頃までを研究対象とする。当時の労働者階級は、おそらくBBCの現代版階級区分の労働者階級と日雇い労働者階級にあたる。

## 1章

階級のように、人を何らかの基準を用いて分け

るという行為は古代ギリシャの時代から行われていた。階級 (class) という言葉ができたのは17世紀である。この言葉の意味を定義づけしたのがカール・マルクス (Karl Marx, 1864-1883) で、彼は経済的視点から物を生産する者 (bourgeoisie) と、生産の労働力を提供する者 (proletariat) に分けた。その後、マックス・ウェーバー (Max Weber, 1864-1920) が教育や技能の視点からも考察し、大きく財産階級と営利階級の2つに分け、さらにこれを細かく4つに分けた。またレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams, 1921-1988) は身分のある人間とない人間の間に挟まれている階級を (middle class) と呼び、製造に携わっている階級を (working class) と呼んだ。本研究はマックス・ウェーバーの考えを中心にしている。

第一次世界大戦と第二次世界大戦はイギリス国民の階級という概念を薄弱化させたと考えられる。理由は2つある。1つ目は戦争の激化に伴い人員不足に陥り、身分を問わず兵士を募り、任務を任せため。2つ目は国内産業の変化により、労働者階級が運命共同体意識を持ったためである。

1950年代、〈怒れる若者たち〉 (‘Angry Young Men’) と呼ばれる労働者階級や中流階級の出自を持った作家たちが登場した。彼らは「現体制」 (Establishment) と呼ばれるイギリスの伝統的な上層階級制度、王政、保守党、教会、兵役、オックスフォードとケンブリッジ大学、パブリック・スクール、上流階級向けの新聞等を敵とみなした。彼らにとってそれらは自慰的で無気力で、腐敗したものだった。本論ではこのグループの作品の中か

ら、アラン・シリトー (Alan Sillitoe, 1928-2010) の『土曜の夜と日曜の朝』 (*Saturday Night and Sunday Morning*, 1958) と、ジョン・ブレイン (John Braine, 1922-1986) の『年上の女』 (*Room at the Top*, 1957) を取り上げる。

2 つの作品の先行研究については、シリトーの方は主人公の社会への反抗的精神に関するもの、ブレインの方は主人公が階級に固執する理由と、上の階級を目指すことは幸福をもたらすのかという問題を扱ったものが多い。本論は、これまであまり扱われなかった小説と実際の労働者像を中心に、シリトーとブレインの労働者階級についての考え方の類似点と相違点を明らかにし、当時の労働者階級の特徴について考察する。

## 2章

アラン・シリトーは労働者階級の出自を持ち、貧しい暮らしを送っていた。彼は 14 歳で働きに出て、18 歳で空軍に入隊し、結核を患い、除隊後、作家になることを決意した。彼は幼少の頃から読書や物語の創作が好きだった。

『土曜の夜と日曜の朝』は彼の経験や考え方、また実際の労働者階級の人々をもとにして書かれた。50 年代イギリスには主人公アーサー・シートン (Arthur Seaton) のようなタイプの若い労働者が多かったことを彼自身も認めている。

アーサーは戦後の生活に不満を抱いていないが、制度や権威を嫌っている。彼は労働者の味方を謳う労働党が、毎週労働者から税の徴収をしたり、制度と称して政府が弱者を丸め込もうとすることに、疑問と嫌悪感を持っていた。そしてアーサーは自分と周囲の人々は平等であると考え、共同体意識を持っていた。実際、シリトー自身も権威や支配に疑問と嫌悪感を示し、アーサーのように平等主義的な考え方と共同体意識を持っていたことを認めている。この共同体意識は労働者階級の人々の特徴で、戦後の大きな社会変化によって消滅していたと考えられているが、アーサーを見る限りそれは失われていないと考えることができる。

## 3章

ジョン・ブレインは下層中産階級の出自を持ち、シリトー同様暮らしは貧しかった。彼は 18 歳で働きに出て、20 歳で海軍に入隊し、結核を患い除隊

した。彼は『年上の女』のヒロイン、スーザン (Susan) のような女性に出会い、彼女を手に入れる方法として作家になることを志した。しかし彼に不幸が続く中、彼女が結婚したことを知り、彼女の記憶を消すために、『年上の女』を執筆した。彼は自身の作品について、自叙伝ではないが彼の人生が全て詰め込まれていることを認めている。

主人公ジョー・ランプトン (Joe Lampton) は労働者階級から抜け出すという野望を持ち、新しい土地へと引っ越す。そこでスーザンに出会い、彼女と結婚し、自身の社会的地位を上げようと画策する。彼は結婚を階級上昇の方法として見ている。一方アーサーは結婚を制度として考えており、結婚に対して否定的であった。ジョーもアーサー同様、権威や支配に対して疑問と嫌悪感を抱いている。ジョーは保守党やケンブリッジに嫌悪感を示している。

ジョーは自身を労働者階級と見なしていない。しかし彼の恋愛情事に対する考え方や、劇団に対して共同体意識を感じている点から、彼は生粋の労働者階級であると考えられる。戦後、消滅されたと言われる共同体意識は、彼の中にも認められるのである。

## 結論

戦争はイギリスの階級意識を薄弱化させた。実際のイギリスでも権威や支配に疑問と嫌悪感を持った労働者階級の人々はいた。また上昇志向を持つ者もいた。

社会が大きく変化する一方、シリトーとブレインの主人公の考え方や行動には、共同体意識が強く表れている。これらの小説を読む限り、戦後もこの共同体意識は、消滅せずに残っていたと考えることができる。

## 主要参考文献

- [1] Braine, John, *Room at the Top*, London: Random House, 2002.
- [2] Sillitoe, Alan, *Saturday Night and Sunday Morning*, London: Harper Perennial, 2008.
- [3] ジョイス, コリン, 「それでも英国から階級は消えない」, 『ニューズウィーク日本版』, 東京: 阪急コミュニケーションズ, 2013.

# ミトコンドリアと脂肪滴の相互作用が 脂肪細胞の炎症状態に与える影響

Effect of interaction between mitochondria and lipid droplets on inflammatory states of 3T3-L1 adipocytes

長谷川 千織

Chiori Hasegawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：脂肪細胞, 3T3-L1, ペリリピン, ミトコンドリア, 炎症性サイトカイン

Key words : Adipocyte, 3T3-L1, Perilipin, Mitochondria, Inflammatory cytokine

## 1. 目的

脂肪細胞は脂肪を合成、蓄積するだけでなく、さまざまな生理活性物質を分泌してエネルギー代謝を積極的に調節する内分泌細胞である。脂肪細胞における脂肪滴の肥大化は、サイトカインの合成、分泌を促し、細胞周辺の炎症を引き起こして生活習慣病の原因になると言われている。またミトコンドリアはエネルギー代謝を行う重要な細胞内小器官で、脂肪細胞の炎症性変化や脂肪滴の状態の制御にも重要であることが近年わかってきている。

本研究ではミトコンドリアと脂肪滴の相互関係を分子レベルで明らかにし、脂肪細胞の炎症性変化の分子機序にせまることを目的とした。ミトコンドリアと脂肪滴の相互関係を探る手がかりとして、脂肪滴表面に存在するタンパク質であるペリリピンに着目した。

## 2. 方法

**細胞培養**：本研究ではマウス胎仔由来の線維芽細胞 3T3-L1 を用いた。この細胞は休止期に入ると脂肪細胞へ分化する性質を持つが、Insulin, Dexamethasone, 3-isobutyl-1-methylxanthine を添加した分化誘導培地で刺激すると効率よく分化する。細胞を播種し、confluent になって 2~3 日後に分化誘導培地を用いて分化させ、分化後 31 日目までの細胞を用いて実験を行った。

**mRNA 発現量の定量**：細胞より ISOGEN を用いて Total RNA を抽出し、cDNA に逆転写後、リアルタイム PCR 法を用いて mRNA の発現量を定量した。**siRNA を用いた発現抑制細胞の作製**：3T3-L1 細胞

を分化誘導後 10 日目まで培養し、DeriverX Plus (Affymetrix 社) を用いてペリリピン 1 及び 4 の siRNA を導入し、ペリリピン 1 及び 4 の発現を一過的に抑制した細胞を作製した。

**shRNA を用いた発現抑制細胞の作製**：分化前の 3T3-L1 細胞に Lipofectamine (life technologies 社) を用いてペリリピン 4 の shRNA を産生するプラスミドを導入し、G418 を用いて shRNA が導入された細胞を選択培養して、ペリリピン 4 の発現が安定に抑制されている細胞株を得た。

**蛍光観察**：分化誘導後 8~31 日目の細胞を、MitoTracker Deep Red (ミトコンドリア)、Nile Red (脂肪滴) で染色し、共焦点レーザー顕微鏡 (Zeiss, LSM510) を用いて観察した。

## 3. 結果と考察

(1) **3T3-L1 細胞の分化過程におけるペリリピン発現量の変化**：細胞を分化誘導後 0~30 日目まで培養し、ペリリピン 1~5 の発現量の経時変化を調べたところ、ペリリピン 5 は発現量が非常に少なかったが、ペリリピン 1~4 の発現が確認された。ペリリピン 1 は分化後 8 日目には分化前の約 70000 倍に発現量が増加した。ペリリピン 2 は分化後 8 日目に約 6 倍、ペリリピン 3 は分化後 4 日目に約 3 倍まで増加し、その後減少して一定量を保った。ペリリピン 4 は分化後 8 日目に約 30 倍に増加したが、その後徐々に減少した。これらの結果からペリリピン 1 と 4 は特に 3T3-L1 細胞の成熟に関連していることが示唆された。

(2) **siRNA を用いたペリリピン 1 および 4 の発現抑制**：分化誘導後 10 日目の細胞に、siRNA を用い



てペリリピン1および4の発現を一過性に抑制し、ミトコンドリアと脂肪滴にどのような変化が見られるか観察した。観察は siRNA 処理の3日後に行った。ペリリピン1の発現抑制細胞では脂肪滴が大きい傾向がみられ、ペリリピン4の発現抑制細胞ではミトコンドリアが細く広がっている様子が観察された。ペリリピン1は脂肪滴の成熟、ペリリピン4はミトコンドリアの形態に何らかの影響を与えることが示唆された。

(3) shRNA を用いたペリリピン4の発現抑制 : shRNA を用いてペリリピン4の発現を持続的に抑制した細胞 (shPLIN4) を用いて、ペリリピン4の発現抑制が脂肪滴の形成やミトコンドリアの形態、エネルギー代謝に与える影響を、蛍光観察と mRNA 発現量の定量により調べた。蛍光観察から (図1)、脂肪滴は分化後の日数が経つにつれて大きくなる control 細胞に対し、shPLIN4 では日数が経っても大きな脂肪滴とともに小さな脂肪滴が多数存在する様子が観察された。また、shPLIN4 のミトコンドリアは control 細胞に比べて細く、また断片化していることが観察された。

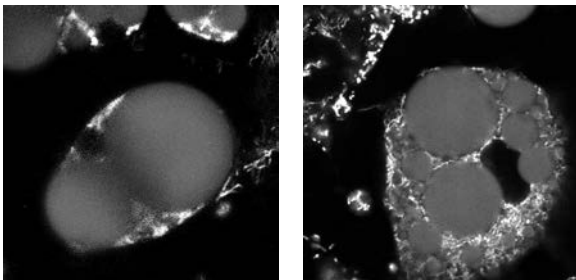


図1. 分化後31日目の control 細胞(左)と shPLIN4(右)ミトコンドリアを MitoTracker Deep Red (白)、脂肪滴を Nile Red (グレー) で染色し、共焦点レーザー顕微鏡で観察した。黒く抜けている部分は核。

mRNA 発現量の定量ではエネルギー代謝やミトコンドリアの融合・分裂、炎症性サイトカインなどを調べた。エネルギー代謝は、分化誘導後30日目では解糖系も電子伝達系も control 細胞に比べて shPLIN4 のほうが有意に低かった。しかし AMPK の発現量も shPLIN4 のほうが有意に低かったことから、ペリリピン4の発現抑制が AMPK の発現量を低下させ、これが解糖系や電子伝達系でのエネルギー産生を低下させたことが考えられた。ミトコンドリアの融合・分裂は、分化誘導後30日目では融合関連タンパク質の発現量が control 細胞に比

べて shPLIN4 のほうが有意に低かった。蛍光観察においてミトコンドリアが断片化していたことを踏まえると、shPLIN4 ではミトコンドリアの融合が抑制されていると考えられた。炎症性サイトカインは、分化誘導後30日目では control 細胞に比べて shPLIN4 のほうが有意に高かった。shPLIN4 ではエネルギー代謝の低下、ミトコンドリア融合の抑制とともに炎症が起こっていることが示唆された。

#### 4. まとめと今後の課題

ペリリピン4を安定的に発現抑制した shPLIN4 では、分化誘導後の日数が経っても小さい脂肪滴が多く存在することが特徴的だった。脂肪滴はひとつひとつが脂肪を蓄積して大きくなりながら、脂肪滴どうしの融合によっても大きく成熟するが、shPLIN4 では脂肪滴どうしの融合が阻害されていた可能性が考えられ、ペリリピン4には脂肪滴を融合させる役割がある可能性が示唆された。また shPLIN4 ではエネルギー代謝全体の低下がみられたにもかかわらず、AMPK の発現量も低下していた。このことから shPLIN4 では AMPK 活性化の感度が下がっている状態になっていたことが考えられる。AMPK 活性化の感度が低下し、電子伝達系の低下が起こり、その結果ミトコンドリア融合の抑制が起こった可能性が考えられた。

今後の課題として、ペリリピンはリン酸化によって作用が変化するタンパク質であるため、ペリリピンの状態についての分析が必要である。また蛍光観察に用いた MitoTracker Deep Red はミトコンドリアの膜電位依存性の色素であるため、膜電位に依存しない形での観察が望ましい。

#### 主要参考文献

- [1] James R. Skinner, Marissa J. Schoenfish, Nathan E. Wolins, Benjamin K. Quaynor, Anatoly Tzekov, Perry E. Bickel, Lipid in Adipocytes S3-12, Adipophilin, and TIP47 Package, *J. Biol. Chem.*, 280:19146-19155 (2005)
- [2] Richard J. Youle, Alexander M. van der Blik, Mitochondrial Fission, Fusion, and Stress, *Science*, 337:1062-1065 (2012)



# 超高齢社会における介護予防を通じた高齢者の発達支援に関する考察

Study on development support of the elderly  
through the care prevention in the super-aged society

小西 英範  
Hidenori Konishi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：高齢者の発達支援，介護予防，高齢者の社会参加

Key words: Development support of the elderly, Care prevention, Social participation of the elderly

## 1. 研究目的

我が国は世界の中でも例を見ない程の，未曾有の高齢社会に突入している。

差し迫った高齢者問題に対して，国は「介護予防」に重点を置いているが，この政策は介護費用の抑制というねらいが色濃くあると同時に，その支援プログラム内容も「機能回復訓練」に偏重したものになっていると考えられる。

本研究は，こうした政策の意図を先行させるのではなく，高齢者本人の視点に立った生きがいのある生き方とは何かを追究し，それを支えることを可能とする介護予防のプログラムの要件を導き出す。

## 2. 研究方法

### 【文献調査】

高齢期における発達課題の整理，ならびに介護予防の概念を文献調査によって明らかにし，現行の介護予防事業に関する問題点や課題点を考察する。

### 【インタビュー調査】

高齢者の実際の活動を調査し，高齢者の社会参加への有効な手段を明らかにする。本研究では，介護予防事業を通して社会参加の機会や自分自身の活躍の場を得る事が出来ている高齢者に焦点をあて，インタビュー調査を実施し，内容の分析を行う。

### 【対象者】

都内近県の介護予防事業に参加している 65 歳～85 歳からなる 24 名の高齢者。（女性 18 名 男性 6 名）

### 【倫理的配慮】

倫理的配慮としてインタビュー開始時に本研究の目的を書面を下に口頭で説明し，インタビュー内容の研究使用と，IC レコーダーによる音声記録の許可を得た。

個人名は個人情報に配慮し，アルファベット表記とした。

### 【分析方法】

対象者に半構造化面接を行い，インタビュアーを得た。これらのデータに対し，質的研究法である，修正版グラウンデッド・セオリーアプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。M-GTA は実践から理論を構築するグラウンデッド・セオリーの一つであり，木下（2003・2007）によって方法論が確立されている。

分析の結果，14 個の概念と 4 つのカテゴリー「現在の生活における関心」「必要となる支援」「変化をもたらす環境」「社会貢献を視野に入れた発達課題の達成」が生成され，すべてのカテゴリーと関連する「介護予防を軸にした高齢者の支援のあり方」がコアカテゴリーに位置付けられた。

### 3. 研究結果

高齢期には様々な変化の影響を受けながらも適応していくという発達概念があり、高齢期における発達の課題を「新しい境遇・環境と遭遇し、関係性を更新し、獲得していくこと」と定義することができる。

高齢者の介護問題が拡大していく中で、「介護予防」の概念は拡大していき、1990年代の社会福祉基礎構造改革の中で、単に健康であることを目指すのではなく、生活の質を向上させるために、自己の責任において実践する行為としての意味を内包した概念へと変化していった。

「介護予防」の概念には様々な意味が付与されているが、明確な定義は成されないまま、読み手の解釈に託されている状態である。このため、健康増進政策における政策目標が重複し、短期間での機能回復や、健康状態の獲得することが介護予防事業の目的と化してしまい、結果的に健康を活かして活動できる環境の整備が遅れている原因になっている。

高齢者の生活を支える様々な制度を持続し、高齢者にとって住みやすい社会を構築するには、公助・共助のフォーマルなシステムだけに頼るのではなく、自助・互助という個人と周辺の住民間のインフォーマルな社会資源を活用し、相互扶助ができる環境を構築する事が求められる。

インタビュー調査の結果では、高齢期において、「何かを始めたい」「何かをしなければ」という関心がなくては、介護予防事業参加への動機は成立しない。また、そのような興味や関心に、応える事のできる環境が整備され、利用や活用する事への支援がなければ、事業に参加する事への定着化を形にすることは困難であり、逆に環境だけ整っていても利用者の関心が無かったり、利用につながる支援がなければ活性化を図ることは出来ないことが分かった。

抽出された概念を集約した各々のカテゴリーは相互に影響を与え合っており、どれか一つが欠けてしまったら、介護予防が、高齢者の発達や、発達の課題の支援方法として成立することは難しいといえる。

3つのカテゴリーの概念が好循環し、展開する

事によって、介護予防事業は個人の欲求を満たすだけでなく、新しい社会資源を生み出す可能性も持っている。そのような活動や役割を担う事で、高齢者の生活に張り合いをもたらすだけでなく、生きがい感を満たし、心身共に向上させることが可能になると。

未曾有の高齢社会における高齢者の社会参加の問題や、膨れ上がる社会保障費への対応が求められる中、介護予防事業はその役割を十分に担う事が出来る。

### 4. 今後の課題と展望

高齢者が生きがいを感じながら生活できる社会を実現するには、社会の環境だけでなく、高齢者自身も自分の生活や、生き方に関心を持ち行動していかなければならない。健康への意識を変え、健康になることだけを目標にするのではなく、健康を活かして、何をするのかという所まで関心を持てるようにする。また、身体機能の低下や障害がありながらも、支援を受けながら、本人の望む生活を実現できる体制を整え、高齢者が気軽に利用できるような社会を創り上げなければならないといえる。

### 主要参考文献

- [1] 笹谷晴美・岸玲子・太田貞司編著 (2009) 介護予防-日本と北欧の戦略- 光生館
- [2] 堀薫雄 (2010) 生涯発達と生涯学習 ミネルヴァ書房
- [3] 城仁士 (2009) do for から do with へ～高齢者の発達支援～ ナカニシヤ出版
- [4] 大橋謙策 (2014) ケアとコミュニティ-福祉・地域・まちづくり- ミネルヴァ書房
- [5] 園田恭一 (2010) 社会的健康論 東信堂

## 平安貴族女性の裳唐衣装束について

On the Mokaraginu Costume of the Aristocratic Women in the Heian period

鹿野 美由紀

Miyuki Shikano

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：平安時代，装束，女性，裳，女房装束

Key words : The Heian period, Women, Mo, Nyoubou costume

### 1. 目的

本研究では、王朝文学から裳唐衣装束着用の用例を把握する。裳唐衣装束とは裳・唐衣を着けた正装であり、袴・単・桂・打衣・表着に裳・唐衣を加えた貴族女性の正装である。今回、この中の裳に着目し、用例を検討した。裳とは、背後に長く引いた巻きスカート状のもので、後ろの腰の部分に大腰、その左右に長く引く引腰、前に結ぶための小腰をつけ、地は細い幅の布を八幅横につないで仕立てた。そして一番上に着用する上、後ろに長く引いて目立つため、刺繍をほどこしたり、銀などの飾り物を縫いつけたりして、装飾を競ったとされている。

この裳の文学作品での用例を、①どのような場で、②誰が、③どのような色合や文様を着用していたかを整理・検討することによって、裳唐衣装束の着用実態を明確にするとともに、様々な意匠のあるその違いを考察した。

### 2. 先行研究

裳についての先行研究をまとめると次のようになる。

- ①裳・唐衣を着用により公け性を帯びる
- ②地摺の裳が禁色
- ③裳の基本の色は白
- ④刺繍や描繪など多くの技法が装飾に使われている
- ⑤裳を何枚か重ねることがある

しかし、いずれの先行研究においても次のようなことの明確性に欠けている。

- (1)どのような装飾が同時になされたか
- (2)どのような着用者が何の材質の裳を着用していたか

- (3)色や文様による着用者の違い
- (4)着用場所の違いや制限
- (5)地摺の裳とはどんなもので、摺裳とどう違うのか
- (6)重ね方の実際

いずれの先行研究においても、装飾の技法や材質、着用人物や場ごとの違いについては細かく書かれておらず、多様な裳の種類による分類はみられなかった。

### 3. 方法

多様な裳の用例を材質や装飾によって表のように分類した。これは、裳の色彩や材質、及び装飾技法などを説明する「…の裳」という形の用例を、表のように、Ⅰ・染色、Ⅱ・摺色、Ⅲ・織色、Ⅳ・材質、Ⅴ・装飾、Ⅵ・重ねの六つの項目に分けたものである。なお、Ⅴ・装飾以外の項目には、「…の裳」という形をとらない用例は分類表には入っていない。また、Ⅳ・装飾では、織り以外の技法では「…の裳」という形の用例は見られなかった。

今回はこの中からⅠ・染色とⅡ・摺色の用例について確認していった。

分類	Ⅰ・染色		Ⅱ・摺色		Ⅲ・織色				Ⅳ・材質			Ⅴ・装飾		Ⅵ・重					
	薄色の裳	二藍の裳	薄純の裳	裾濃の裳	(1)摺裳	地摺(2)の裳	棟の裳	萩の裳	菖蒲の裳	紫苑の裳	萌黄の裳	薄の裳	羅	綾	唐物	織物	刺繡	繪	飾

表1. 技法・装飾分類表

### 3. 染色の裳

<薄色の裳>

染色で最も多くの用例が見られた色である。「薄色の裳」は仕事の多い日常から、歌合のような晴

れの場合、また喪の色の代用としても使用できる物であったが、「薄色の裳」そのものには特定のイメージはついていなかった。また着用する場の違いによって、改まった場では『蜻蛉日記』の「薄色なる薄物の裳」や、『落窪物語』の日常風景で着用された「薄色の穀の裳」のように、材質の違いがあったと考えられる。

#### <二藍の裳>

「薄色の裳」と同様に、転居の際に着用していることから、「二藍の裳」も日常的に使用することができた。若い人向きという年齢によるイメージはあったが、使用に際して制限はなかったといえる。

#### <薄鈍の裳>

喪服の濃さには規定があり、女房は濃い色の喪服を着用することはできなかった。そのため、「薄鈍の裳」が用いられた。

#### <裾濃の裳>

「裾濃の裳」は領巾・裾帯が同時に描かれる宮廷女房の場合には着用には制限があり、「青裾濃の裳」は采女の装束であったようである。「裾濃の裳」の着用はあまりなく、祝いの場で女房が正装として用いる際は、目立つために用いられたと考えられる。

## 4. 摺色の裳

### <摺裳>

「地摺の裳」と同一視されることが多いが、必ずしも「摺裳」と同じではない。しかし、場面描写の都合などにより「摺裳」と記述されている中にも「地摺の裳」はある。また、材質の明記されていない平絹の「摺裳」と思われるものよりも、「綾の摺裳」の方が身分の高いものであった。

### <地摺りの裳>

「地摺の裳」の着用は、『夜の寝覚』以外は全て祝いの場であり、日常では裳・唐衣を着用しない主人が着用することで儀式の盛大さと公式さを描いた。また許された人しか着用できない禁色の「地摺の裳」を着用することで、その人物および女房の仕えている主人の権勢を描くことができたのではないかと考えられる。

材質は唐綾・薄物が見られた。着用者から、材質にも一定の制限があった。薄物が多く見られ、「地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる御裳」を、中宮が着用している。この用例から、普通「地摺の

裳」では象眼は用いられていないことがわかる。また、中宮の着用のため、「地摺りの唐の薄物に象眼重ねたる」裳が、最高級品であったと考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

用例の多くに色が描写され、その色は「薄色」であった。「薄色の裳」は、日常のイメージを持ちながら、晴の場で使用でき、また喪の色である「薄鈍の裳」の代用ともなる万能な色であった。しかし、着用する場には明らかな制限があり、色だけではなく、材質に拠るところが大きいと言える。また、「薄色の裳」で喪服の代用ができないのは、濃い色を着ることになっていた近親者の場合であった。

同様に、違いが明らかになっていない「摺裳」と「地摺の裳」においても、着用者による違いによって、摺出される模様には制限が設けられていたと言える。そして、摺色についても材質による身分差があったと考えられ、また禁色である「地摺の裳」の中にも、上下はあったものと考えられる。

そして、裳の描かれる多くの場面では、その着用者の家の繁栄や、主人の権勢を誇示する目的があった。それを最も効果的に表せたのが、最も上に着用する裳であった。

今後、触れることのできなかった織色・材質・装飾・重ねの表現について考察することで、裳の着用実態とその裳に表されたものを考えていきたい。

## 主要参考文献

- [1] 江馬務『日本服飾史要』（星野書店・一九三六年）
- [2] あかね会編『平安朝服飾百科辞典』（一九七五年・講談社）
- [3] 増田美子『日本衣服史』（二〇一〇年・吉川弘文館）
- [4] 畠山大二郎『「薄色の裳」考—中古文学における裳の一スタイル』（『国学院大学大学院平安文学研究』三号・二〇一一年）
- [5] 宇都宮千都『「紫式部日記」中「織物ならぬをわろしとにや」に関する一試論—平安中期における女房装束の禁制をめぐって』（『日本文学』四六号・一九九七年）



# 発達障害児支援に携わる 学生ボランティアが抱える困難について —学生への支援策の検討に向けて—

The difficulty of the student volunteer who participates in developmental disorder child volunteer.  
—For consideration of aid to a student—

伊藤 里恵  
Rie Ito

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：支援者支援，発達障害，援助動機

Key words：Supporter support, Developmental disorder, Helping motive

## 1. はじめに

近年発達障害児に注目が集まったことにより、発達障害児支援者が抱く困難感やそれに対する支援策についての研究が見受けられるようになった。発達障害児支援活動のなかでも今地域での支援活動の必要性が謳われているが、この考え方はまだ始まったばかりであり、新たな視点からの援助の在り方を検討する必要があると高橋・石倉(2004)は指摘している。こういった地域での発達障害児支援活動では学生ボランティアが活躍している場合も多く、筆者も活動をおこなっていた経験がある。発達に障害をもつ子ども達と関わる活動はときに学生の負担にもなり、姿をみせなくなる者も少なくなく、学生への支援の必要性を感じさせられた。妹尾・高木(2003)はボランティア活動の援助効果が認識されるほど支援者側に援助成果が得られ、再び活動がおこなわれやすくなるというボランティア活動の継続過程を明らかとしている。

## 2. 目的

学生ボランティアがおこなう発達障害児支援活動が継続されていくために、本研究では発達障害児支援に携わる学生ボランティアへの支援策の検討へ向けた基礎的研究として、学生ボランティアが発達に障害をもつ子ども達との関わりの中で感じている困難を明らかとし、そのような困難を抱えてもなお活動をおこなう理由ややりがいについて検討するための調査をおこなうこととする。

## 3. 方法

**予備調査** 発達障害児支援に携わる学生ボランティアが抱える困難を把握するため、予備調査として発達障害児支援活動をおこなっている A 大学児童福祉ボランティアサークルの学生 13 名(男性 7 名、女性 6 名)を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、『子どもとの関わり』が共通した困難であることが明らかとなった。

**本調査目的** 本調査は発達障害児支援に携わる学生ボランティアが子どもとの関わりの中で感じる困難さについてより具体的に理解すること、また困難さを抱きながらも活動を続けるそのやりがいや活動継続理由の把握を目的として実施された。  
**調査対象者** A 大学児童福祉ボランティアサークルの学生 11 名(性別：男性 6 名、女性 5 名／学年：大学 3 年生 5 名、大学 4 年生 6 名)。

**質問項目** ①活動に参加している子ども個人についての聞き取り(性別、学年、学生が把握している障害名、その子どもを担当した際に感じた困りごと等)、②これまでの活動で最も困った体験とそれに求める支援策、③発達障害児ボランティア活動で感じるやりがいと活動継続理由

**分析方法** 録音したインタビュー内容を全て逐語記録に起こし質的分析をおこなった。

## 4. 結果

子ども個人についての聞き取りでは、48 名の子どもの情報が得られた。その結果、当団体で対象としている子どもは学齢期の男子が多く、特に自閉症と受け取られやすい子どもが多いこと、発達

の程度や傾向の異なる子ども達がともに活動していることが明らかとなった。学生が子どもとの関わりの中で抱く困難については 130 件の回答が得られた。その回答を子どもの行動特徴別で分類した結果、23 の上位カテゴリーに分類された。最も多く回答が得られたのは【多動および衝動的行動がある】(19 件)であり、次いで【意思疎通困難】(17 件),【イタズラをする】(14 件)等があげられた。学生ボランティアがそのような子どもの行動に対し抱く困りごとは 9 の上位カテゴリーに分類された。最も多く回答が得られたのは【子どもの行動への対応困難】(73 件)であり、次いで【他人に迷惑をかける】(20 件),【子どもに指示を伝えることが難しい】(11 件),【対応の仕方が分からない】(11 件)等があげられた。学生が最も困る子どもの行動特徴として最も多く回答が得られたのは【パニックを起こす】(6 件)であり、そのすべてが『ボランティアのミスを含むストレスを起因にパニックを起こす』に関する回答であった。求める支援策では 17 件の回答が得られ、7 のカテゴリーに分類された。最も多く回答されたのは【情報や知識の充足が必要】(7 件)であった。

活動のやりがいでは 19 件、活動継続理由では 20 件の回答が得られた。活動のやりがいでは上位カテゴリーとして、子どもや学生の成長を意味した【成長】(8 件)、自分の存在が誰かのためになったと感じられることを意味した【自分の存在価値】(6 件)、人との関係が築き上げられることを意味した【関係性】(5 件)の 3 つがあげられた。活動継続理由では上位カテゴリーとして、活動の楽しさや良好な人間関係を意味した【活動志向動機的理由】(14 件)、困難を乗り越え自己の成長を感じることを意味した【自己志向動機的理由】(4 件)、子どものために援助をおこなうことを意味した【他者志向動機的理由】(1 件)と【その他】(辞めたいと思うことがなかった)の項目があげられ、【活動志向動機的理由】が全体の 4 分の 1 を占めていた。

## 5. 考察

以上の結果から、学生は子どもへの対応の仕方や意思の疎通がとれているのかも分からない手探りの状態で、周囲の視線を気にしながら子ども達が次々起こす行動への対応に追われていることが推測された。特に大きな負担となる子どもの行動としてはパニックがあげられ、学生はそのパニックに自責の念を感じやすいこともまた窺われた。

そこにはボランティアとしての責任感や知識不足が関係していると考えられ、求める支援についての聞き取りでも知識・情報の充足をもとめる声が多くあげられた。これらのことから学生ボランティアへの支援として子どもの知識や情報を充足するための場の提供が考えられるが、最近では発達障害児支援に対するステレオタイプ化が問題視されており、ただ知識をつけることが発達障害児、ひいては学生への有効な支援には足り得ないだろう。今回の調査結果からは、学生が子どもとの関わりの中で抱いた困難を乗り越える過程がやりがいや継続理由としていることが窺われた。この特性を生かしつつ、学生の成長促進につながる支援策として、発達障害とグループ運営に関する知識や経験をもった専門家が加わった形の学生を主体とした子どもについての検討会が考えられる。学生同士が子どもとの関わりの中で抱いた困った体験を語り合う場の提供は、学生が自ら考え活動をおこなう良さを残しつつ発達障害知識の補いや理解深まりが可能になるほか、子どもの情報の共有や学生同士の交流を促進する効果も考えられる。この検討会はやりがいや活動継続理由とされていた学生が困難を乗り越えるという過程の促進にもつながると考えられるほか、学生の負担軽減と支援の質の向上による援助成果の高まりが見込まれ、妹尾・高木(2003)が提言した活動継続過程が成立し、学生ボランティアの継続した発達障害児支援活動がおこなわれることが予想される。

## 6. 今後の課題

今回学生ボランティアへの支援策を提案したが、その支援が実施可能なのか、学生にとって有効であるのか実際に支援をおこないながら今後検討していく必要があるだろう。

## 主要参考文献

- [1] 高橋信幸・石倉健二(2004). 自閉症児を対象とした集団活動の意義についての検討—臨床心理学的地域援助の視点から—, 長崎国際大学論叢, 4, 233—241.
- [2] 妹尾・高木(2003). 援助行動経験が援助者自身に与える効果—地域で活動するボランティアに見られる援助効果—, 社会心理学研究, 18(2), 106—118.

# カウンセラーの共有不全経験についての検討

Examination about empathy insufficient experience of the counselor

樽澤 百合

Yuri Tarusawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：臨床経験，共有不全経験，スーパーヴィジョン

Key words : Clinical experience, Insufficient sharing experience, Supervision

## 1. 問題と目的

近年、様々な研究によって共感の重要性が述べられており、治療効果をもたらすことも示されている (Barrett-Lennard, 1962, 1981; Greenberg et al, 2001). しかし、すべてのクライアントのすべての内容に関して共感することは難しく、クライアントの苦痛の度合いによっては共感しようとすることによってカウンセラーに苦痛が生じ、嫌悪感などが引き起こることも示唆された (海保・松原, 2010; 遠藤・石井・佐久間, 2014). そのため、角田 (1998) は、上記のように共感不全が共感を妨げる要因となるのであれば、「相手の気持ちを感じられない」体験に目を向ける必要があると述べた。そして、他者の感情を感じ取れず、自己と他者の間に個別性の認識を生むことを「共有不全経験」とした。この共有不全経験とは、例えば「相手が何かを怖がっていても、自分はその怖さを感じなかったことがある。」というようなことである。また、他者の気持ちを理解できることを「共有経験」とした。共有経験とは、例えば「相手が楽しい気分になっている場合に、その楽しさを感じ取ろうとし、その人の気持ちを味わったことがある。」というようなことである。このように共有不全経験、共有経験を規定し、共感を捉えていこうとした。しかし、実際にカウンセラーはどのように共有不全経験を体験し、それによって生じた感情などに向き合っているのかということの研究したものは少ない。

そこで、本研究では、カウンセラーがカウンセリング場面でクライアントに対して抱く共有経験や共有不全経験という観点から、どのようにカウンセラーがそれらの経験をし向き合うのかを質的

に検討することを目的とした。

また、海保・松原 (2010) や Stoltenberg & Delworth (1987) などにより、初心者と熟練者の臨床場面での発達や問題解決法に関して違いがみられるものの、初心者・熟練者を問わず共有経験や共有不全経験が生じることが推察される。しかし、重要視されている共感を初心者と熟練者という観点から共有不全経験をも含んだ共感に焦点を当てて研究したものは少ない。さらに、より実践に即した尺度を用いて検討した研究は少なく、質的研究と加味して検討を行った研究も少数である。

よって、カウンセラーの臨床歴による共感の変化を量的に検討することも目的とした。

## 2. 方法

### 質的研究における方法

インタビュー調査に同意が得られた臨床心理士養成大学院生、臨床心理士養成大学院卒業後 1 年目の計 7 名にカウンセラーとしてクライアントに関わっている際に生じる共有経験や共有不全経験に関して、半構造化インタビュー調査を実施した。

その際、調査対象者に許可を得て、インタビュー内容を IC レコーダーを用いて録音した。インタビュー後、質問紙の回答を求めた。調査に要した時間は 1 時間半程度であった。

### 量的研究における方法

質的研究での調査対象者も含め、共同研究者であった鈴木 (2014) の調査協力者 (質問紙調査に同意が得られた臨床心理士養成大学院生や臨床心理士などカウンセリング経験のある) 計 56 名に質問紙調査を実施した。

質問紙は、感情コンピテンス尺度、日本版カウ



ンセリング自己効力感尺度、臨床経験年数などのデモグラフィック要因を尋ねるものであった。本研究において、鈴木 (2014) が、Saarni (1999) によって提唱された感情コンピテンスの 8 つのスキルを網羅した尺度とするため、情動コンピテンス尺度 (久木山, 2002) をもとに改良を重ね、項目に使われる言葉遣いなどを研究に適する項目として計 43 項目に改良したものを用了。

### 3. 結果

#### 質的研究における結果

グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析した。

その結果、上位カテゴリーとして 5 カテゴリーが生成され、カウンセリング中には『共有経験』と『共有不全経験』のどちらも経験されることがあり、カウンセリングが終わった直後には、カウンセリングの共有不全経験が変化していき『カウンセリング後の共有不全経験』が経験されることが明らかとなった。そしてカウンセリング後、共有不全経験で生じた不全感などに対して『不全感の解消や元気づけ』を行うことによって共有経験が得られるよう変化していくことが明らかとなった。しかし、『バイザーに振り回される』ことによって共有経験も共有不全経験へと変化してしまう場合もありうるということが明らかとなった。

これら 5 カテゴリーは一度経験されて終結するのではなく、何度も繰り返し行われるというように円環的なプロセスとして生じるものであった。

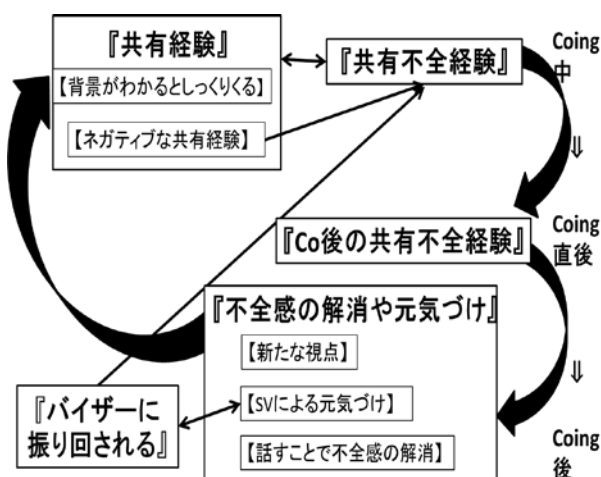


図1. カウンセラーがクライアントとの関わりから経験する共有経験・共有不全経験とその対処

#### 量的研究における結果

臨床経験年数による共感性の変化を検討するため、感情コンピテンス尺度を分析対象とした。まず、感情コンピテンス尺度の因子分析を行った。その結果、既存の 8 因子ではなく、4 因子となった。そこで第 1 因子を「自分の感情に気づく能力」因子 ( $\alpha=.860$ )、第 2 因子を「他者の感情を識別し理解する能力」因子 ( $\alpha=.861$ )、第 3 因子を「内的主観的感情と外的感情表出を区別する能力」因子 ( $\alpha=.729$ )、第 4 因子を「嫌な感情や苦痛な状況に適応的に対処する能力」因子 ( $\alpha=.563$ ) と命名した。

つぎに、臨床経験 1 年未満の者と臨床経験 3 年前後～10 年の者の 2 群に分け、初心者と熟練者として感情コンピテンス尺度の変化が見られるかを検討するため t 検定を行った。その結果、感情コンピテンス尺度全体の得点、感情コンピテンス尺度の第 1 因子得点、第 2 因子得点、第 3 因子得点において各 2 群間で有意な差がみられ、さらに、既存の感情コンピテンス尺度の共感性に関する下位項目得点において 2 群間で有意な差がみられた。

よって、上記の各得点において、臨床経験 3 年前後～10 年の者が臨床経験 1 年未満のカウンセラーの者よりも有意に高いことが明らかとなった。

一方、感情コンピテンス尺度の第 4 因子得点において臨床経験 1 年未満の者と臨床経験 3 年前後～10 年の者の 2 群間に有意な差は見られなかった。

#### 4. 考察と今後の課題

質的研究や量的研究において、初心者と熟練者のスタイルの確立が来ているか、自身の方略に対しての自信があるかなどと初心者において生じることや熟練者において生じるとされていることと同様の傾向がみられる部分もあった。

このように、自信が持てず戸惑いや不安な状態であっても、何とかクライアントに寄り添おうとし、援助によっては共有経験となったり、共有不全経験へと転じさせることとなることが窺え、そしてこれらのプロセスは円環的であることが窺えた。今回の質的研究では、初心者のみが対象者となっていたが、熟練者においても同様に経験されるのか検討していくことが求められるだろう。

#### 主要参考文献

[1]角田豊. 共感体験とカウンセリング 福原書店, 1998



## 臨床心理士を目指す院生同士の関係性と ピアグループの関連

The relation between relationships and peer groups among graduate students  
aiming for clinical psychologist

堀 安由美  
Ayumi Hori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：大学院生，関係性，ピアサポート

Key words : Graduate student, Relationship, Peer support

### 1. 問題・目的

臨床心理士養成指定大学院（以下大学院）では、大学院生（以下院生）が臨床心理学的援助に必要な技法や態度を身につけるための教育カリキュラムが設けられている。臨床心理学的援助とはクライアントが持つその人特有の価値観を尊重するため、一人一人によって援助の方法が異なる。そのため技能として定式化することが難しく、院生は技能の習得やその効果を実感するまでにかなりの時間を要する。また、クライアントを援助するためには自分自身と向き合い、専門家としての態度を身につける必要もある。

日本心理臨床学会の大学院カリキュラム委員会<sup>1)</sup>が院生に対して推奨している学習態度には、学生が主体的に知識を獲得していく「能動的学習法」という学習方法が挙げられている。主体的に学ぶとする学習態度が院生に求められているが、その態度は臨床心理士としての学びの基礎ともなる。

しかし、臨床心理学的援助は曖昧で理解しづらい側面もあり、自分と向き合うことも容易ではない。また、院生は臨床心理学的援助や心理援助者に対する理想や期待を持っており、自身の理想を思うように実現できなかつたり、実践の場で自身のセラピーの面接が進んでいるのかどうかが見えにくかつたりして不安を感じる。そしてそのような状態の中で、ケースカンファレンスなどの人前にて失敗を教員に指摘されると、院生は自信をなくし、失敗が学習体験ではなく「傷つき」体験になってしまうことがあると言う<sup>2)</sup>。

院生が自身の失敗と向き合い、能動的に学習に取り組むために必要なことの一つとして、仲間と共に学ぶこと—ピア・ラーニングが挙げられる。同じような立場の仲間（ピア）との学習は学習への動機づけを高め、複眼的な視点を共有するため、質の高い学習成果が得られる。また、同じ体験をした者同士で体験を分かち合うことは、学習する上で生じたつらさや苦しさや向き合い、自分自身と向き合う契機となることも考えられる。このことから、院生同士が学習を目的として作るピアグループには失敗と向き合うための受容的な環境や学習に対する能動性が想定される。しかしピアグループの有用性を決定する要因には、グループを構成する院生同士の「関係性」や大学院の構造といった「外的環境要因」が関連しているため、それらを考慮する必要があるだろう。

院生が能動的に行ったグループ学習に関する先行研究として、太田他の研究チームが 2009～2014 年までに行った一連の研究<sup>3)</sup>があるが、ここで対象としたグループは開催の構造が明確に定められていた勉強会であった。しかし大学院には様々なカリキュラムがあり、その都度時間をとって勉強会を開催することは難しいだろう。そこで、本研究では、院生同士で能動的に協同しあいながらグループ学習を行っているのか実態を調査し、特に構造がゆるやかで自然発生的に生じるピアグループについて実態と、大学院の外的環境要因と院生同士の関係性がどのように関連しているのかを検討することを目的とする。

## 2. 方法

臨床心理士養成第一種指定大学院 7 校に在籍している修士課程 2 年生 23 名（男性 8 名，女性 15 名，平均年齢 26.1 歳 ( $SD=6.79$ )）から協力を得た。

調査は事前にアンケートを記入してもらい，後日 1 度に同じ大学院に在籍している調査協力者を平均 2.9 名 ( $SD=1.25$ ) 集め，半構造化グループインタビュー調査を行った。発言内容は同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビューの所要時間は平均 95.9 分 ( $SD=28.69$ ) であった。得られたデータは GTA に準じて質的に分析した。

## 3. 結果と考察

まず外的環境要因については，大学院のカリキュラム制度が院生同士の関係性を築く要因の一つとなっていることが明らかになった。また，関係性を築く要因には院生室の構造が関連しており，院生室の有無が院生同士の物理的接触に大きく関係すると言える。

次に院生同士のピアグループの実態について本研究から，院生の行っている学習活動は開催頻度，参加対象，構造化の程度，主催，参加者，および活動内容によって 6 つのグループに分けられることが明らかとなった（図 1）。院生同士のみの学習活動では受容的で自由な雰囲気の中で活動できる一方，知識の正確さについての懸念が生じるため，時には教員の力を借りて学習の機会を設けることもあった。

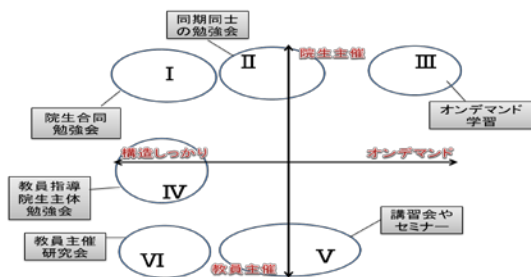


図 1 学習活動の内容ごとのグループ

また，インタビュー調査の内容から，【院生同士の関係性】に関して 26 の下位カテゴリーと 5 の上位カテゴリーに，【学習活動の生じるプロセス】に関して 7 の下位カテゴリーと 1 の上位カテゴリーにまとめられた。本研究で注目した自然発生的で構造がゆるやかな学習活動については勉強会から愚痴まで幅広い種類が見られたが，学習や事例検

討の視点の育成という実質的サポートと，同期との交流による情緒的サポートを得られる場となっていた。同期に会って情緒的サポートを得ることがピアグループの意識的な目的となっているが，日々の学習から院生は臨床心理学に没頭するようになっている。かつ，臨床実践が最も重要なものであるとされるだけに非常に大変でつらいものを感じる。そのため，ケースや実習についての話題が特に起こりやすくなると考えられる。このように院生同士の愚痴という形でケースや実習について話すことは，自身の体験を他者に伝えようとすることに繋がると言えるだろう<sup>11</sup>。

一方，院生にとって教員は学習における実質的サポートとして最も頼りにされている存在であるが，自身の未熟さの自覚から，情緒的サポートへの期待は小さいことがわかった。

以上のように，本研究で取り上げた院生同士の関係性は，M1 から M2 にかけて築かれていくものである。同期との関係性によって『学習活動における同期の存在』と『院生生活における同期の存在』についての内的イメージが形成され，関係性が肯定的である場合は，内部の院生同士の学習活動が活発に行われ，同期同士のピアグループを資源としてみなす一方，関係性が否定的である場合は，内部の中で資源となりうる一部の者や外部に向かって学習の資源を求めていくと考えられる。表面的には愚痴という形を取りながら，その内実は援助要請であるという院生同士で自然発生的に生じる学習行為は，セルフヘルプ・グループに近い働きを持ちながら，相互援助だけでなく学習に対する動機づけを高める働きも持つと考えられる。

## 付記

本研究は，大妻女子大学人間生活文化研究所平成 27 年度大学院生研究助成(A)(課題番号 DA2712)より研究助成を受け行った。

## 主要参考文献

- [1] 日本心理臨床学会カリキュラム委員会(2001). 心理臨床学研究, 19 (特別号), pp.6-10, pp.47-53.
- [2] 岩壁茂 (2007). 心理療法・失敗例の臨床研究—その予防と治療関係の立て直し方, 金剛出版
- [3] 太田秀樹他 (2009). 臨床心理実習 (学外実習) における質的向上に関する研究 1) 日本心理臨床学会第 28 回大会発表論文集, pp.241.

# 青年期における対人場面での自分についての苦悩 —対人不安の程度による違いの検討—

Suffering about self at interpersonal situations in adolescence  
—Study of the differences in the degree of interpersonal anxiety—

堀江 智美

Satomi Horie

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：対人不安，自己，質問紙

Key words : Interpersonal anxiety, Self, Questionnaire

## 1. 問題・目的

青年期は、自我同一性を確立する時期であり、他者に自分を「見せる」、「見せない」、「見られる」ということが問題となる。そして、自分や他者を意識しすぎるあまりに対人関係に不安が生じるとされる。このような対人関係への不安は、先行研究を概観すると、重篤な症状を呈するもの（対人恐怖）、から比較的軽い症状を呈するもの（対人不安）まで、幅広い概念であることが分かった。

本研究では対人不安に焦点を当てることとし、社会的状況において個人が示す行動を自己との関連から説明した「自己過程（中村，1990）」の概念を用いて研究を進めることとした。自己過程は①自己の姿への注目の段階、②自己の姿の把握の段階、③自己の姿への評価の段階、④自己の姿の表出の段階、の4段階からなる（図1）。



図1. 自己過程の4つの段階  
(中村 (1990) より筆者作成)

この自己過程の各段階について、対人不安に関する先行研究と強い関連が見られたことから、対人不安傾向が自己過程に影響を及ぼすと仮定した。自己評価や自己表出、さらに他者評価は自己概念を明確にする働きがあり（山口，1990；安藤，1990）、自己概念が明確になると自己開示量が増えることが明らかになっている（榎本，1991）が、事例研究や先行研究から、対人不安傾向の高い人においては、それらが自己概念を明確にする役割を果た

すことができていないと推測し図2、図3のような対人不安傾向の高さ別の自己過程のモデル図を作成した。

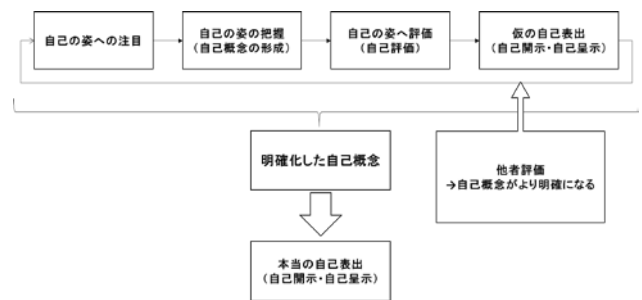


図2. 対人不安傾向の低い人の自己過程（堀江，2015）

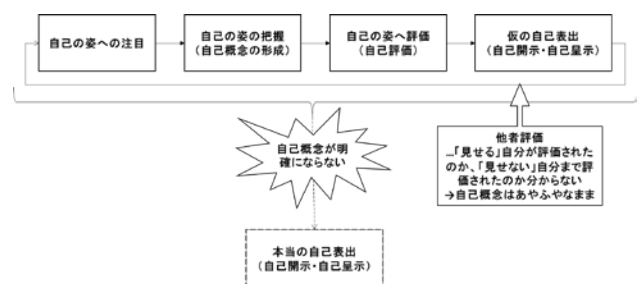


図3. 対人不安傾向の高い人の自己過程（堀江，2015）

本研究では、図2、図3の「明確化した自己概念」、「本当の自己表出」の段階に焦点を当てて対人不安傾向の高低による自己過程の違いを検討するため以下の4つの仮説を検討することを目的とする。

## &lt;仮説&gt;

- ①対人不安傾向が高いほど、自己概念の形成が不十分である。
- ②対人不安傾向が高いほど、本当の自己表出が困難である。
- ③対人不安傾向の高低によって、対人場面での振る舞いとそれにまつわる感情や感覚が異なる。
- ④対人不安傾向が高いほど、「見られている」ことを意識し、それにまつわる苦悩がある。

## 2. 方法

調査は、女子大生 206 名（平均年齢 20.0 歳，SD=1.31）を対象に，対人不安の程度を測定する尺度，自己概念の明確性を測定する尺度，自己開示の程度を測定する尺度及び，会話場面を想定した，自分の振る舞いについての自由記述と尺度評定からなる質問紙調査を行った。

## 3. 結果

重回帰分析の結果，対人不安因子の<生きていくことに疲れている>，<自分を統制できない>，<他者にどう思われるか気になる>ことに関する悩みが明確な自己概念の形成に負の影響（ $R^2=.32$ ， $p<.01$ ）を与えていることが伺えた。また，対人不安の<人前で話すのが苦手>因子は自己開示の<身体・パーソナリティ・金銭>，<道徳観>因子にわずかに影響を与えていた。しかし，自己概念の明確性は自己開示に影響を与えているとは言えない結果となった。以下の図 4 に結果を示す。

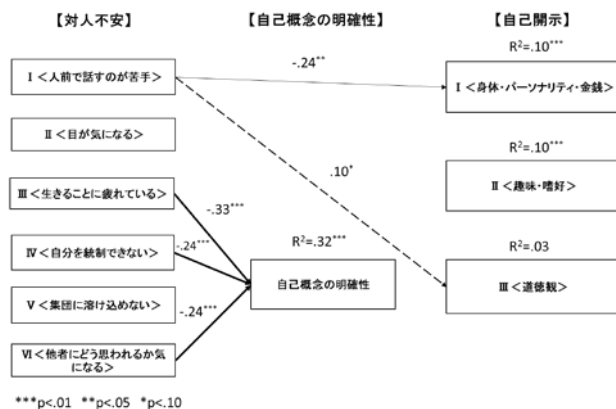


図 4. 各尺度のパス図

重回帰分析では以上のような結果となったが， $t$  検定では，対人不安高群と低群で自己概念の明確性および自己開示の量に有意な差が認められた（表 1）。また，対人場面での振る舞いについて，対人不安高群は明るいキャラクターでいる傾向や

表 1. 対人不安高群と低群の各尺度における平均値の差

	高群		低群		t値
	M	SD	M	SD	
自己概念の明確性尺度	16.4	3.24	22.64	6.44	4.78**
自己開示尺度	34.48	6.93	40.67	11.03	2.60*
—I <身体・パーソナリティ・金銭>	19.62	4.52	23.67	7.91	2.43*
—II <趣味・嗜好>	10.07	2.07	11.85	2.29	3.23**
—III <道徳観>	4.83	1.53	5.15	1.91	0.73

\*\*\* $p<.01$ , \*\* $p<.05$

聞き役に回る傾向があるが，その裏側では「疲れる」，「辛い」といったネガティブな感覚を抱いていた。さらに，対人不安高群は相手に「見られる」ことを強く意識し視線や他者からの評価に敏感になっていた。一方対人不安低群は，対人場面において自分の「一部だけ見せる」傾向があり，その振る舞いについて「何も感じない」，「普通」のことに認識していた。さらに，対人不安低群は相手に「見られる」ことがはっきりとわかる状況において自分の見た目を気にする傾向が見られた。

## 4. 考察

以上の結果から，仮説①～④は全て成立するといえる。特に対人不安傾向の高低によって対人場面における振る舞いや，他者に見られることに対する意識の仕方に質の違いがあることが伺える。対人不安傾向の高い人は，対人場面において自分の持つ側面を見せず，演技で明るいキャラクターという姿を見せているが，明るいキャラクターでない自分を見せないように抑えることの疲れ，演技をしている自分や聞き役として発言が少ない自分が他者にどのように見られているのかという不安などを抱えていると考えられる。一方，対人不安傾向の低い人は他者に対して自分の一側面を示しており，見せない自分と見せる自分の間にへだたりが少ない為に，「見せる自分」と「見せない自分」との間での苦悩は少ないと考えられる。また，「見られていると感じる自分」については，見せる自分と見られる自分が同じであるという捉え方ができるために，見られる自分という外見を意識するのではないかと考えられる。

しかし，本研究において，図 2，図 3 のモデルのように自己概念の明確性から自己開示へのパスは形成されなかった。今後は，尺度の再検討や概念モデルの吟味が必要であると思われる。

## 主要参考文献

- [1] 中村陽吉(1925-) (1990). 自己過程の社会心理学 (初版版). 東京 東京大学出版会



# 川端康成『愛する人達』論 —戦時下女性雑誌との交渉から—

A Study of Kawabata Yasunari's "Aisuru Hitotachi":  
Interaction with Women's magazines in the World War II

藤崎 英恵  
Hanae Fujisaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：女性雑誌，検閲，文学

Key words：Women's magazine, Censorship, Literature

## 1. 目的

アジア・太平洋戦争期の川端康成にとって、女性雑誌は重要な作品発表の場だった。中でも『婦人公論』に連載された『愛する人達』（1940・1～12）は短編連作であり、女性登場人物の結婚・出産・身体、セクシュアリティに関わる問題を描いたものだ。

女性雑誌の話題は、性役割分業、異性関係の情報を中心に構成されている。どの短編も当時の女性雑誌記事と話題を共有していることは明らかである。これまで、川端のテキストと戦時下女性雑誌メディアの関わりは先行研究の中で十分に検討されてこなかったが、この時期は丁度川端の代表作である『雪国』（1935～48）の執筆とも重なり、重要な作品形成期間であることは看過できない。

本論文の目的は、戦時下女性雑誌言説や先行研究を踏まえ、『愛する人達』を読み直すこと、戦時体制下の検閲・統制といった政治的なコードと川端小説テキストの関わりを再検討することである。

## 2. 戦時下女性雑誌の役割・機能

木村涼子は、女性雑誌のイデオロギー装置としての働きを明らかにした。近代的な女性像は社会的・文化的によって規定されたものであり、女性がそのジェンダー秩序を受け入れるプロセスには国家的な強制と自発的に秩序を受け入れていく両面がある[木村：2010]。当時の女性は家庭という閉鎖的環境に置かれ、社会的に孤立する。そのため女性雑誌メディアによって形成された読者の共同体は、多くの女性にとって私的な悩みを共感、共有できる数少ない場となった。「姉や母のように、実

用的な知識や技能を伝達」し、読者を教化し、戦時下「女性像」をつくる雑誌メディアであった。

また、検閲や統制により女性雑誌の記事や広告は軍事色に染まったと見なされてきたが、石田あゆは「消費の政治・文化の観点から見れば、その連続性が見られる」と指摘する[石田：2014]。戦時下とはいえ読者の購買意欲を掻き立て、ニーズに応え満足させられなければ、雑誌の存続は出来ないのである。女性雑誌は戦争の宣伝を積極的に引き受けながらも、たとえば戦時色を嫌う化粧品広告を掲載するという矛盾した状況さえ起きた。

この女性雑誌メディアが持つ問題性は、「小説」記事とも直接関わる。小説は、挿絵・広告と協力し、読者に物語を提供する。一方、政治的コードにより意味の削除や統制を強いられている。以上の問題意識から『愛する人達』テキストを検討した。

## 3. 川端康成『愛する人達』

『愛する人達』は「母の初恋」（1月）「女の夢」（2月）、「ほくろの手紙」（3月※初出では「悪妻の手紙」）「夜のさいころ」（5月）「燕の童女」（6月）「夫唱婦和」（7月）「子供一人」（8月）「ゆくひと」（11月）「年の暮」（12月）の全9篇である。

当時の検閲担当部局である警保局図書課は「婦人雑誌ニ対スル取締方針」（1938・5）を告示した。それによると、次の内容が取締りの強化対象とされている。「恋愛又ハ、卑俗ナル小説」、「有夫ノ婦ノ恋愛関係ヲ題材トセルモノ」、「女子ノ貞操觀念ニ疑惑ヲ抱カシムルガ如キモノ」、さらには「告白記事」の「性欲問題等」、性に関する「挑発的記事」

「衛生記事」である。つまり、女性雑誌の中で中心的話題となる「恋愛」小説、「不倫関係」「貞操」を問題にしたもの、告白記事や衛生記事でも「性」的内容を扱うことは出来ない。

このコンテクストを踏まえると『愛する人達』は明らかに異質だ。「母の初恋」の雪子は、夫の元を飛び出して義父・佐山を恋愛対象として選ぶ結末になっている。「夜のさいころ」のみち子は子供の時に「いたずら」をされ、貞操を奪われた描写がある。「ほくろの手紙」は、「オナニー」行為の隠喩が描かれ、テキスト全体がエロティックに描写されている。いずれも性的な隠喩、インセスト（的）関係を描く時局下の政治コード、雑誌の打ち出す家族規範から逸脱する危ういテキストである。

しかし同時代女性雑誌小説との比較検討を行うと、実はこの類の逸脱は同時期の女性雑誌としてはありふれていたことが判明した。例えば、『婦人公論』に連載された石川達三「花のない季節」(1939・3~40・2)には未亡人を主人公にしたエロティックかつ擬似的なインセスト、痴情のもつれが引き起こす死などが描かれている。このようにストーリーの起伏が激しく、娯楽性の高い小説は読者からも好まれた。これらの小説は最終的に時局下の家族規範などに回収されるものの、セクシュアリティの逸脱は、少なくとも物語の山場として設定されている。また「体験告白」「相談」記事では、「貞操」や「性」の悩み、夫・家族に対する不満や問題などが頻繁に取り上げられたのである。

以上のことから女性雑誌テキストの書き手や編集者は検閲・統制の政治的な方針には表面上従いながらも一方で書きたい内容を書くため、あるいは購読者を保持し読者に好まれるものを書くために、表現方法を模索しなければならなかった事実を示している。

新城郁夫は、戦時下テキストの『愛する人達』に従来の家族規範に亀裂や破綻を来たす恋愛が描かれたことを、川端の実験性・特異性として位置付けているが[新城：1990]、それだけでは同時代の女性雑誌小説との差があるとはいえない。

『愛する人達』の問題性は、政治的制約とテキストの交渉がいかなる表現方法を通して行われているかにある。本論文では「母の初恋」「ほくろの手紙」「年の暮」を主な対象とし、分析を試みた。

#### 4. テキスト分析・まとめ

『愛する人達』は表面的に、戦時下女性雑誌と話題を共有し、「家庭」や「結婚」の物語を提供していた。しかし一方で戦時下のコードから逸脱する内容である。

精読すると、「性愛」の相がメタファーや空白を通して描かれ、さらに「女性登場人物の同一化」「男性作家と読者」といった位相の異なる物語が潜んでいることが明らかになった。つまり、ある相を前景化すると、ある相が後景化するという構造になっている。テキストは読み手が選択するコンテクストによって、異なった物語を提示してしまうのだ。

『雪国』では検閲により、性表現が削除され、書き換えられた。セシル・坂井は「検閲は表現の妨害というよりは、一種の強いいられた省略、つまり新たな駆け引き」と指摘した[坂井：2012]。『愛する人達』はまさに、意味の統制、削除の検閲が行われていた戦時下女性雑誌の小説である。テキスト内部には、川端作品世界にとって重要な、性的なメタファー=「部分的」なモチーフ、「連想的」な語り的手法が色濃く現れていることは間違いない。

もし、川端テキストの「表現」方法が戦時下女性雑誌や政治的コードと深い関わりを持つならば、川端テキストで度々議論される「空白」や「実験性」の意味合いが変化する。『愛する人達』の「不穏さ」は、戦時下女性雑誌の政治コードに抵触しかねない出来事を描写によって回避し、巧妙に隠蔽するテキストの性質によるものであったのだ。

本論文では、戦時下川端テキストの評価や位置付けだけでなく、小説テキストが戦時下の政治的コードや女性雑誌言説といかに交渉したか、そのプロセスの一端を明らかにした。

#### 主要参考文献

- [1] 木村涼子『〈主婦〉の誕生 婦人雑誌と女性たちの近代』（吉川弘文館、2010）
- [2] 石田あゆ『戦時婦人雑誌の広告メディア論』（青弓社、2015）
- [3] 新城郁夫『『愛する人達』論—「婦人公論」という表象空間—』（『川端文学の世界』2巻 勉誠出版、1999）
- [4] セシル・坂井「検閲、自己検閲の連続性—川端作品において」（鈴木登美他編『検閲・メディア・文学 江戸から戦後まで』新曜社、2012）

## 栄養士養成施設卒業生の食習慣、健康度に関する包括的検討

A comprehensive study of dietary habits and health conditions of university graduates majoring in food science and nutrition

佐野 美里  
Misato Sano

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：栄養士養成施設、食習慣、健康度

Key words : Nutritionist training facility, Dietary habit, Health degree

### 1. 目的

近年、管理栄養士は活躍の場を広げ「食」の専門家として国民の健康増進や健康維持に重要な役割を果たしている。健康教育に関する業務に従事する者の健康への価値観は教育効果に影響を及ぼすとされており、栄養士においても効果的な教育を行うため、食や健康に関する正しい知識を持ち、自らが好ましい食行動を身に着けることが必要である。しかし、栄養学の習得が卒業後の食習慣へ与える影響については報告が少なく、栄養士に関する調査は、卒業後の就労状況等に止まっているものが多い。

よって本研究では、栄養士養成施設を卒業した女性を対象とし、青年期（学生時代）に習得した栄養学の知識や卒業後の専門就業経験と青年期から中高年期に至るまでの体格の変化、食習慣、生活状況、健康関連 QOL 等の相互関連性について検討を行う。

### 2. 方法

1975～1984（昭和 47～59）年 3 月に大妻女子大学家政学部食物学科を卒業した者（年齢； $57.2 \pm 3.5$  歳）へ 2011 年に調査依頼を行った。参加承諾を得ることのできた 224 名へ半定量食物摂取頻度調査票（FFQ）および生活習慣調査表を送付し、206 名から回収を得た（回収率 92%）。さらに参加承諾のあった者の中で在学時に行った秤量式食事記録調査（DR）および身長体重値の存在する者についてデータベース化を行った。さらに、食育や健康度を把握するために 2015 年に再度、参加承諾者へ食に関する意識調査および QOL 調査票（SF-36）

を送付し、160 名から回収を得た（回答率 71.4%）。これらの調査より、下記の検討を行った。

#### ①青年期と中年期以降の食品選択と食嗜好

青年期から中年期以降の食嗜好の変化を把握するために DR と FFQ の栄養素・食品群別摂取量の変化について比較を行った。

#### ②青年期から中年期以降までの体格変化

体重増加量により対象者を -5kg 以上減少(n=25)、-5kg 未満減少(n=35)、0kg 以上 5kg 未満増加(n=72)、5kg 以上 10kg 未満増加(n=26)、10kg 以上増加(n=18)の 5 群に分類し、青年期・中年期以降の栄養素・食品群別摂取量、生活習慣について検討を行った。

#### ③健康度（QOL）による比較

調査票から下位尺度を得点化し、さらにそれらをグループ化し 3 つのサマリースコア（身体・精神・役割/社会的健康度）を算出し、スコアの低から高へ対象者を 4 群に分類した。4 群と生活習慣・生活環境、食習慣、食意識について検討を行った。

#### ④栄養士経験・勤務年数による比較

対象者を栄養士経験有り(n=118)、経験なし(n=109)、栄養士としての勤務年数により対象者を 4 年未満(n=28)、4 年以上 12 年未満(n=29)、12 年以上 28 年未満(n=33)、28 年以上(n=28)の 4 群に分類した。栄養士経験、栄養士勤務年数区分それぞれと中年期以降の栄養素・食品群別摂取量、食習慣、食意識、食育について検討を行った。

解析は、JMP9.0 を用い、t 検定、一元配置分散分析、スピアマンの順位相関係数、Tukey HSD 検定、Kruskal-Wallis 検定を行った。なお、危険度 5%以下(P<0.05)をもって有意とした。

本調査は大妻女子大学生命科学研究倫理審査委



員会の審査・承諾を得て実施した（平成 25 年 9 月 25 日）。

### 3. 結果

#### (1) 青年期と中年期以降の食嗜好

青年期に砂糖・甘味料，菓子類，緑黄色野菜を多く摂取している者は中年期以降も摂取量が多い傾向であった( $p<0.05$ )。しかし，一般女性と比較すると対象者の方が砂糖・甘味料が少なく，緑黄色野菜摂取量が多い結果であった。

#### (2) 青年期から中年期以降の体格変化

国民健康・栄養調査結果では，50 代女性の肥満者割合は 23.0%であったが，本研究の対象者の中年期以降の肥満割合は 9.6%で一般女性と比較すると肥満者が少ない。しかし，青年期肥満であった者 5 名は全員が中年期以降も肥満である。

体重の増加量に青年期の栄養素・食品群別摂取量は影響がなかったが，中年期以降の栄養素・食品群では炭水化物は体重増加量が多いほど摂取量が多くなる傾向であった( $p=0.03$ )。

メタボリックシンドローム予防・改善について体格変化で差がある項目はなかったが適切な運動を実施している割合は体重減少量が多いまたは増加量が多いほど低い結果であった。

#### (3) 健康度 (QOL) による比較

本研究対象者は，精神的側面 (MCS) が国民平均値より高く (+3.7)，身体的側面 (PCS)，役割/社会的側面 (RCS) が低い (-0.8, -4.8) 結果であった。

PCS は余暇でスポーツをする( $p<0.01$ )，家族団欒をする( $p=0.03$ )ことでスコアが有意に高くなり，MCS はストレスがある( $p=0.01$ )，精神的/総合的ゆとりが充分でないことでスコアが有意に低く( $p<0.01$ )，余暇でスポーツをする( $p=0.02$ )，趣味をする( $p=0.01$ )，家族団欒をする( $p=0.02$ )ことでスコアが有意に高くなる傾向であった。

#### (4) 栄養士経験・勤務年数による比較

栄養士経験，勤務年数による年齢，身長，体重，BMI に有意な差はなかった。

栄養士経験，勤務年数によって栄養素摂取量に差はなかった。食品群別摂取量は，経験者の方が野菜( $p=0.02$ )，緑黄色野菜( $p=0.02$ )が有意に多く，菓子類( $p=0.03$ )が有意に少なかった。勤務年数が長くなるほど調味料が少なくなる傾向( $p<0.01$ )であった。主食・主菜・副菜を揃えて食べる頻度は栄

養士経験者の方が有意に高い傾向であり( $p=0.03$ )，一般女性と比較しても高い頻度であった。さらに栄養士経験者は子に対して食育を実施している割合が高かった(40.3%)。

### 4. 考察

本研究より，栄養士養成施設校で栄養学を習得することにより，自らの体型認識が正しくなり中年期以降も肥満者が少ないことが明らかとなった。しかし，体重増加量が多い者では専門的知識を習得したにも関わらず，好ましくない食習慣を送っていることや運動習慣がなく，健康維持増進のため正しい食習慣や運動習慣を持たせるような教育が必要であると考えられる。

本研究対象者は一般女性に比べ，精神的健康度が高い結果であった。これには，良好な食生活を送ることでメンタルヘルスを高く保つことができるといふ報告もある。

先行研究から健康度 (QOL) は主観的な健康度 (ゆとり) と関連していることが報告されているが，本研究でもゆとりを感じているもので精神的スコアが高い結果であった。さらに，主観的健康は，趣味やいきがいを持つことで向上するとの報告もあり，本研究においても余暇を活発に過ごすことと精神的健康度に関連がみられた。

さらに，栄養士養成施設校卒業生は卒業後も一般女性よりも高い食意識を持っていた。さらに，子への食育を実施していた割合が高い。知識不足が食育の妨げになっているとの報告もあり，専門的知識の習得は家庭での食育にも役立っていることが明らかとなった。

### 5. まとめ

本研究により，栄養士養成施設卒業生は在学時から食に関して高い意識を持っていることや専門的知識を習得することで，一般女性と比較すると好ましい栄養素・食品群別摂取量であり，肥満が少ないことが明らかとなった。卒業後約 40 年の期間に栄養士という専門職に就く経験によって，好ましい食生活や食意識に変化することが明らかとなった。

さらに健康度 (QOL) に影響を与える要因が主観的健康度であることと，余暇を活発に過ごすことが主観的健康感を高めることが示唆された。



# 日本のドラマにおける謝罪表現について —ベトナム語母語者の観点から—

A comparative study about apology representation in drama of Japan  
— From Vietnamese native speakers' the point of view —

グエン ティー ホア ミー

Nguyen Thi Hoa My

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：謝罪表現, 日本のドラマ, 比較

Key words : Apology representation, Japan's drama, Compare

## 1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、多様な日本語の謝罪表現について、日本のドラマを用い、謝罪の相手と謝罪の目的に視点をおいてその用法を明らかにするところにある。さらに、在日ベトナム人の学生に対して日本語の謝罪表現についての小調査を行うことにより、異文化の目を通して日本語における謝罪表現とその背景となる文化のあり方について検討してみたいと考える。

日本語の謝罪表現の研究には様々な日本のドラマが研究素材として用いられている。ドラマのシナリオを用いる場合には、以下のような利点を期待することができる。

- (1)多様な場面の謝罪表現の用例を検討することができる。
- (2)映像があるため非言語情報も視野に入れた用例の検討が可能である。
- (3)ドラマの謝罪表現は日常的な謝罪表現に比較的近い。
- (4)再生が可能である。
- (5)データの入手が比較的容易である。

もちろん、ドラマは、視聴者に向けたメディアとして人工的に制作された言語資料であり、実際に使用された日本語ではない。しかし、ドラマには、視聴者の誰もが理解可能な形での謝罪表現が用いられている。つまり、ドラマの言葉は人工的に創作された日本語でありながらも、日本語らしい日本語が用いられている資料であるとも考えられる。

尚、現代日本語の謝罪表現を考察の対象とする

ため、素材として用いたドラマは 1990 年代以降のものとし、恋愛、家族関係、人間関係、子ども、日本人と外国人の関係、日本語教育等を内容とするものを選定した。したがって、本論に使用したドラマは、この条件に合致する『101 回目のプロポーズ』(1991), 『君のためにできること』(1992), 『振り返れば奴がいる』(1993), 『この世の果て』(1994), 『ドク』(1996), 『日本人の知らない日本語』(2010), 『マルモのおきて』(2011), 『理想の息子』(2012), 『半沢直樹』(2013) の 9 本である。

## 2. 謝罪表現の分析

調査対象とした 9 本のドラマに見られる謝罪表現の総使用度数は 274 である。丁寧度の高いものから順に次のような類型を立てることとする。

I 類 「申し訳ない」とそのパラフレーズ(申し訳ありません・申し訳ありませんでした・申し訳ございません・申し訳ございませんでした)

II 類 「すみません」とそのパラフレーズ(すまない・すまなかった・すみませんでした・どうもすみません・どうもすみませんでした)

III 類 「ごめん」とそのパラフレーズ(ごめんなさい)

その他(「私が悪いです」「お詫び申し上げます」「お詫びいたします」「勘弁してやってください」「謝る」「君に謝罪したい」「許してくれ」)

本研究では、上記の各類型の謝罪表現について、

謝罪の相手と謝罪の目的を捉えて分析を行う。具体的には、今回の調査に多くの例が見られたビジネスの相手に対する謝罪表現・友人に対する謝罪表現・家族に対する謝罪表現を取り上げることにする。また、用例の多かった「謝罪」、「感謝」、「断り」を目的として使用する謝罪表現を主に分析する。調査対象の謝罪表現では、謝る側と謝られる側の人間関係が、職場での同僚、先輩・後輩、上司と部下などの関係や、友人、知人、隣人同士の間柄や家族での親子関係等、既知の人間関係である場合が多く見られた。

### 3. 結果と今後の課題

日本語の謝罪表現は相手との人間関係や場面を捉えながら使い分けられている。そのために多様な表現が見られるのである。たとえば、相手との親疎関係を捉えることによって、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類のように謝罪表現が変化する。ただし、相手との人間関係の変化や話し手の心情の変化を示すために、スタイルシフトを行い、その場で本来、期待される表現とは異なる種類の謝罪表現を用いることもある。

また、日本語では、謝罪表現を使用する際に、必ずしも自己の非を認めて謝罪するわけではない。自己の非は認めないものの、相手とのコミュニケーションを維持することを目的として謝罪表現を用いたり、単なる社交辞令として使用したりする場合もある。主な目的としては「謝罪」以外に「感謝」「断り」を挙げることができる。また、使用度は高くないが「注意喚起」「挨拶」を目的とするものも見られる。このため、外部から日本人のコミュニケーションを観察すると、謝罪が多いというステレオタイプなイメージを外国人に抱かせる原因となっている。しかし、一步踏み込んで観察してみると、表面的には謝罪表現として位置づけられているものの、表現の目的は、相手との関係の維持が目的であったり、単に社会的な儀礼として表現することが目的であったりするなど、必ずしもその目的が「謝罪」ではないことも多いことがわかる。また、総使用度は、高い方からⅡ類>Ⅲ類>Ⅰ類という順になる。日常生活ではⅡ類とⅢ類が主に使われるためであるが、ビジネスの場面ではⅠ類が頻繁に用いられていると言える。

さらに、先行研究により、ウチとソトを区別し、「本音」と「建前」を使い分ける日本の習慣につ

いて言及し、ベトナム人留学生の視点から日本語の謝罪文化の背景を分析した。その結果、ベトナム語では区別して表現される謝罪と感謝・断り・注意喚起が、日本語では、謝罪表現の中に混在しており、それらを相手や目的に応じて使い分けているということが理解できる。

以上により、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類の表現類型と目的との相関関係については、ある程度言及することが可能となったが、今後さらに「場面」を視点とする考察を深めていく必要がある。そのような考察を通じて、日本語が持っている「謝罪」とは、本来どのような意識から生じ、また、その際に、相手や場面にしたがってどのような表現が選択されているのか、そのシステムを明らかにすることが今後の課題として残されている。また、現時点ではベトナム語との関連について深く言及できていないが、日本語の代表的な謝罪表現である「すみません」とベトナムの唯一の謝罪表現として意識されている「xin lỗi」(シンロイ)を深く検討し、相違点を探っていく必要があると考える。

### 主要参考文献

- [1] 井出祥子 (1992) 「日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用」『言語』第 21 巻 12 月号・大修館書店
- [2] 小野由美子, 許清平, 森清隆, 森勇樹 (2000) 「日本語母語話者にみる感謝と謝罪表現の使用—「ありがとう」「すみません」再考—」『鳴門教育大学実技教育研究』第 11 号・鳴門教育大学
- [3] 小森万里 (2001) 「すみませんの意味・機能」『近畿大学語学センター紀要』・近畿大学語学センター
- [4] 泉子・K・メイナード (2001) 「心の変化と話しことばのスタイルシフト」『言語』第 30 巻 7 号・大修館書店
- [5] 新井芳子 (2003) 「映像教材における謝罪表現—学習者の「気づき」の観点からの考察」『日本語教育研究』第 45 号・財団法人言語文化研究所
- [6] 柏木厚子(2015) 「映画・テレビドラマにみる日米謝罪表現の差異——オリジナル言語版および吹き替え版の分析から——」『学苑』第 893 号・昭和女子大学 近代文化研究所

# 和服の柄合わせに関する研究

## Study on matching patterns of Kimono

渡部 栞

Shiori Watanabe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：柄合わせ，浴衣，着物

Key words : Matching patterns, Yukata, Kimono

### 1. 目的

近年、日本文化を再認識する動きが若者の間にも多く見られるようになった。本学でも、伝統的な学びとされる和服製作の授業では、入学直後から浴衣について学んでいる。

和服、特に浴衣を仕立てる際の「柄合わせ」の作業は反物から布を裁断する時に必要となる。和服製作においては、初心者が最初に取り組む作品が浴衣である場合も多く、浴衣を仕立てるに際して最初に行われる柄合わせの作業はひととき難しいとされる。このように難しいとされる柄合わせ作業の円滑化のために、柄合わせをシミュレーションするソフト開発や研究もこれまでも行われている<sup>1)</sup>。しかし、実際の教育の場で使用するにはまだ課題が多く残っている。

そこで本研究では、和服、特に初心者が最初に取り組む浴衣を取り上げ、浴衣地の染色法として代表的な注染染めによる浴衣地の柄合わせに着目することにした。そして、和裁初心者には難しいとされる柄合わせの“マニュアル化”を試みた。柄合わせの作業をマニュアル化することで、初めて縫う浴衣の柄合わせをスムーズに行い、失敗や後悔の残らない良い柄ゆきの浴衣を仕立てることができないかと考えた。

### 2. 方法

#### 1) 注染反物の現状調査・モデル反物の作製

本研究では、実際の注染反物の現状を調査するために注染反物の画像 175 点を収集した。それらについて幅・柄一単位・総丈の寸法を調べた。また、柄の種類による分類も行い、その調査結果を

参考に考察で用いるモデル反物のデザインを決定した。

#### 2) 着姿で柄合わせを考察する方法の考案

先行研究ではコンピュータ画面上に反物から裁断した各パーツを並べて柄合わせの検討を行っている。それに対し本研究では“着姿”をシミュレーションする方法を考案し、特に“着姿時”における良い柄ゆきに重点を置いて検討を行うことにした。

そこで、photoshop での画像加工により、反物の画像から着姿を再現する「着姿シミュレーション」、一方で着姿の状態から反物の柄ゆきを再現する「展開シミュレーション」を考案した。

#### 3) 着姿で良い柄ゆきの条件設定・及び条件を満たす裁断方法の選抜

着姿の状態の良い柄ゆきになるための各パーツの裁断法とそれらの組み合わせを、着姿シミュレーションと展開シミュレーションを用いて考察した。さらに一反 12m の反物から裁断可能な裁断方法を選び、さらにその中から、様々な始まり方の反物に適応出来る裁断方法の選抜を行った。

#### 4) 考察で判明した裁断法のマニュアル化

考察により判明した適応力の高い裁断方法を参考に、初心者が反物裁断時に参考とすることが可能な『裁断・柄合わせ方法のマニュアル』を作成し、その有用性について検討した。

### 3. 結果と考察

#### 1) 注染反物の現状調査・モデル反物の作製

調査の結果から図 1 のモデル反物を作成した。

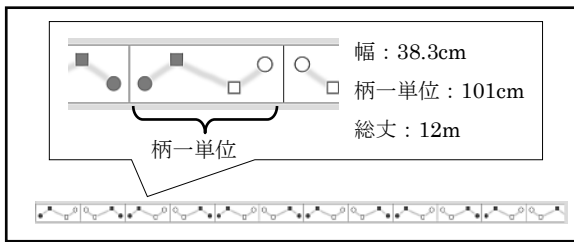


図 1 本研究で用いたモデル反物

## 2) 着姿で柄合わせを考察する方法の考案

着姿シミュレーションの完成により、図 2 に示す反物画像を着姿に加工できるようになった。また、着姿シミュレーションを利用し、図 3 に示す展開シミュレーションをも完成することができた。

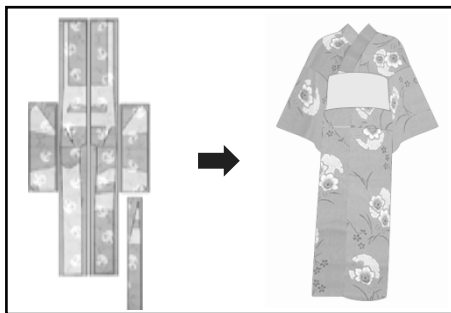


図 2 着姿シミュレーション完成



図 3 展開シミュレーション完成

## 3) 着姿で良い柄ゆきの条件設定・及び条件を満たす裁断方法の選抜

一見、反物の裁断の方法は無数にあるように思われたが、見た目の良さを追求しつつ、反物が 12m しかないという制限も考慮すると、実現できる柄合わせには限りがあることが分かった。最終的に、設定した条件を満たし、様々な柄ゆきの始まり方の反物に対応できる裁断方法を一つに絞った。

## 4) 考察で判明した裁断法のマニュアル化(図 4)

《マニュアルの構成》

- ①対応できる反物や、完成する浴衣の寸法の説明。
- ②手持ちの反物が該当するタイプを確認。
- ③各タイプの裁断箇所決定・糸印の方法・裁断・布の合わせ方の確認・完成した浴衣の着姿予想図。

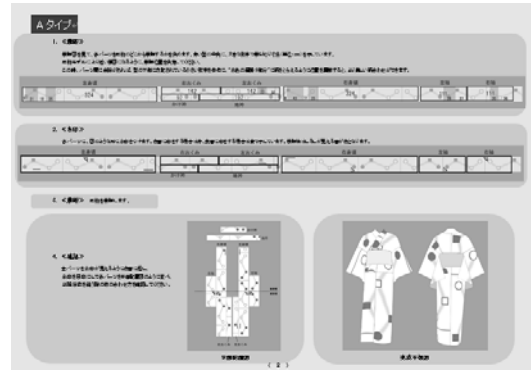


図 4 柄合わせマニュアル

## 4. おわりに

先行研究では、平面に並べる方法で行われた柄合わせ作業であるが、本研究で着姿の状態で見える部分を調べたことで、見える部分の柄ゆきにポイントを絞った裁断法を考察することができた。また、着姿シミュレーションによって完成(ゴール)となる着姿を提示できたことで、マニュアルに説得力をもたせることが可能となった。

モデル反物や各シミュレーション法を用いて、無数にある裁断の方法を「着姿で良い柄ゆきになり、様々な反物に対応でき、一反から裁断が可能な柄合わせの方法」の 1 つに絞った。方法が限られていたがゆえに、和裁初心者向けの柄合わせマニュアルを制作することができた。

一方で本研究にもまだ不十分な点を見出すこともできる。実際の講義等で和裁初心者がこのマニュアルを手にしたときに、瞬時に裁断と柄合わせの作業の流れを理解することができるのか、そして実際にその通りに操作をすることができるかを検証する必要があると考えている。

また、本研究では浴衣に使用される代表的な反物である注染のみにスポットを当てて考察を行った。しかし注染染めとは別に、染め型紙の長さが異なる長板染めや、近頃は片面プリントの浴衣地等、浴衣の反物は他にもいくつかの種類がある。これらの反物にも本研究の柄合わせの考え方が当てはまるのか、マニュアルは適応し得るのか等、確認すべき点を残しているといえる。

## 主要参考文献

- [1] たとえば、呑山委佐子他；被服構成学の授業におけるパーソナルコンピューター応用の試み(第 2 報)，浴衣の柄合わせ，大妻女大紀要，家政系 Vol.35, p1-18(1999)



# 1908年前後における《轢死》 —夏目漱石『三四郎』を中心に—

The Depiction of Being Killed by a Train in 1908  
— On *Sanshiro* by Natsume Soseki —

大橋 綾香  
Ayaka Ohashi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：夏目漱石、『三四郎』、轢死

Key words : Natsume Soseki, *Sanshiro*, Being killed by a train

## 1. 目的

本研究は、日露戦争以後、特に1908年（明治41年）前後を中心として、轢死という表現について、多角的な検討を試みるものである。特に、『三四郎』を他小説と比較することで、夏目漱石が表現した轢死について考察する。

また、本研究では、汽車に轢かれて死ぬことを轢死と表記する。轢死の語源は、篠田鉦造『銀座百話』（岡倉書房 1937年）によると、鉄道に轢かれ自殺することを示す言葉が必要になり、新聞記者によって作られた語である。しかし、1908年前後の新聞記事等では、自殺も事故も含めて轢死として表記していることが多い。また、轢死と日露戦後文学の関わりについて指摘した平岡敏夫は、『日露戦後文学の研究 上』（有精堂出版 1985年）において汽車に轢かれ死んだことを轢死として扱っており、自殺以外のものも轢死と呼んで扱っている。これらを踏まえ、本論では前述したように汽車に轢かれて死ぬことを轢死とした。

## 2. 〈明治〉と鉄道、そして轢死

1908年前後の東京では、轢死による自殺が流行っていた。1907年6月には、轢死を扱った「蛇窪の踏切」（江見水蔭）、「窮死」（国木田独歩）が『ふた昔』（博文館 1907年）誌上に同時に発表され、翌年には、夏目漱石の小説『三四郎』、熊谷守一の絵画『轢死』が発表された。

熊谷守一の『轢死』は、若い女である点、顔が無傷である点、上半身と下半身が切断されている点、明かりを頼りにして暗闇で見る点など、『三四

郎』と共通点が多い作品である。絵画『轢死』に対して、木下杢太郎（「白馬會を評す」（『読売新聞』1910年5月29日 別刷）は、「轢死！如何に近世的世相なるかよ」と評している。

『第37回日本帝国統計年鑑』（内閣統計局編 東京統計協会 1913年）で、1907年と1902年を全自殺者数と鉄道自殺者数で比較すると、1907年は1902年に比べ自殺者数は減少しているが、鉄道自殺者は2倍近くになっている。また、「珍談奇聞」（『太陽』16巻7号 1910年5月）では、1908年の東京における自殺者が「轢死が三番目に多い」と書かれ、「東京の警察（3）変死傷の統計」（『東京朝日新聞』1910年8月15日朝刊）では、「鉄道自殺も相応に流行っている」と指摘されている。

また、日本の資本主義の新しい整備と発展のために、鉄道は近代化を進めるために、国有化を行うことが必要であった。

これらの時代状況を背後におけば、文学・美術というジャンルを超えて、前述した作家たちが着目した轢死という現象こそ、1908年前後において「近世的世相」を示すものだったことになる。

## 3. 1908年前後の轢死小説

現在、轢死が描かれていると確認した1908年前後の轢死小説は、次の13作品である。

表 1. 1908 年前後の轢死小説

発表年月	作品名
1901 年 8 月	・無名庵主人「轢死人」 (『人情世界』6 年 19 号 日本館)
1904 年 7 月	・生田葵山「和蘭皿」 (『新小説』9 卷 7 号 春陽堂)
1907 年 6 月	・江見水蔭「蛇窪の踏切」 ・国木田独歩「窮死」 (『文芸倶楽部』増刊 13 卷第 9 号 『ふた昔』 博文館)
1908 年 9 月	・芳野「轢死」 (『女子文壇』4 卷 13 号 女子文壇社) ・夏目漱石「三四郎」 ※9 月 25 日に轢死の場が掲載される
1908 年 10 月	・徳永有鄰「半面」 (『文芸倶楽部』14 卷 12 号 博文館) ・石川啄木「青地君」 ※市立函館図書館に所蔵される啄木の遺稿中、『刑余の叔父外拾壹篇』と題する二百字詰原稿用紙百五十枚を綴った小説の草稿
1908 年 11 月	・水野葉舟「霧」 (『中学世界』11 卷 15 号 博文館)
1909 年 5 月	・服部貞子「闇の夜」 (『女子文壇』5 卷 7 号 女子文壇社)
1910 年 3 月	・野上白川「ミナ」 (『新文藝』2 号 新文藝社)
1910 年 6 月	・野上白川「崖下の家」 (『新文藝』5 号 新文藝社)
1912 年 7 月	・小川未明「心臓」 (『早稲田文学』80 号 早稲田文学社)

1907 年 6 月に、「蛇窪の踏切」(江見水蔭)、「窮死」(国木田独歩)が『ふた昔』誌上に同時に発表されたことに対し、平岡敏夫は『日露戦後文学の研究 上』(有精堂出版 1985 年)で「従来の文学史では、けっして併記されることのない両者が、それぞれに轢死という、もっとも鮮烈なイメージに想到し、日露戦後の状況と人間に一步踏み込んでいるところに、新しい戦後文学の問題が提出されている」としている。

この 13 作品で描かれる轢死は、自ら線路に飛び込む形が多い。これらの小説内での轢死する原因は、情死、もしくは病気や身寄りがない者である。つまり、社会的弱者が鉄道自殺を図る形が多いことが分かった。

#### 4. 轢死に遭遇した三四郎

漱石作品では、汽車の音が気味の悪い、不吉なものとして書かれている。例えば、『吾輩は猫である』(1905 年)では、迷亭が死を連想するのは汽

車の音である。また、漱石が『三四郎』執筆中に書いた断片には「汽車轢死以前」とあり、轢死を描くことは意識していたと分かる。今回は三四郎の変化を轢死以前以後で分け、3 章と 9 章での行動を中心に比較することで、三四郎に与えた轢死の影響についても考察した。また、『三四郎』で女が死ぬ大久保は、時代の変化を受けた場所として「新開町」と呼ばれており、自殺者も多いことが分かった。

こういったことから、汽車によって、体を斜め切りにされ轢死した女は、社会によって、もしくはどうしても出来ない力によって、大きく変容した姿であるといえる。漱石は、時代の流れを受け変容したものの一例として三四郎の前に若い女の轢死を出したのではないか。その上で、三四郎にどのような変化が起こるのかを表現したのではないかといえる。

#### 5. 『三四郎』の轢死描写

1908 年前後の小説を比較したことで、『三四郎』で描かれる轢死の特徴は、ばらばらになった死体を見た上で死体の顔と目を直視する点である。現在確認できる轢死小説を比較してきただけだが、『三四郎』の轢死場面が、ほかの小説では、あまり見られないことは確かであろう。

さらに、轢死する場面を描いた挿絵の共通点は、轢死する人物の顔を描かず、汽車の前へと向かう自殺者の背中を描いている点である。(現在、確認できているものは、服部貞子「闇の夜」と夏目漱石「三四郎」の 2 点である。)

死体の顔と目を直視する点は、同時代の小説・挿絵と比べると特殊である。しかし、『三四郎』の轢死に言及することはあっても、轢死した死体の顔を直視する点に対してはなかった。この特殊性は、当時の漱石も読者も意識した可能性がある。

#### 6. 今後の課題

日露戦争の報道における兵士の死体についても研究し、それを踏まえ、日露戦争前後における死体を見ることに関する意識の違いを文学等から研究することである。それらを通して、漱石が描いた轢死の特徴がさらに明らかになるはずである。

## 校外実習における給食運営に関するカリキュラムの検討

Study of the curriculum on the foodservice management in off-campus training

登坂 三紀夫

Mikio Tosaka

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：校外実習，給食運営，カリキュラム

Key words : Off-campus training, Food service management, Curriculum

### 1. 目的

管理栄養士養成課程における臨地実習及び栄養士養成課程における校外実習（以下「臨地・校外実習」）については、厚生労働省から適切な実習を実施する際の参考として『管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習要領』<sup>[1]</sup>（以下「臨地・校外実習要領」）が示され、現在臨地・校外実習は同要領に従って実施されている。臨地・校外実習要領において、管理栄養士養成施設及び栄養士養成施設（以下「養成施設」）のいずれにおいても、「給食の運営」に係る校外実習が義務付けられている。

臨地・校外実習計画の策定に当たって養成施設の多くは、学生の受け入れ給食施設（以下「実習施設」）に対し「臨地・校外実習の実際—改正栄養士法の施行にあたって—」<sup>[2]</sup>を参考にして作成した、各養成施設独自のカリキュラムや希望する教育・指導内容を提示した上で実習の依頼を行っている。そのため、各養成施設が依頼するカリキュラム等による実習内容に統一性がなく、結果として同じ実習施設に複数の異なるカリキュラムや教育・指導内容の臨地・校外実習が依頼されている。

そこで本研究では、養成施設が求める教育・指導の内容と実習施設における現状との乖離を確認するとともに、共通している教育・指導内容や特徴的な教育・指導内容を整理し、実施の可能性を考慮した「給食の運営に係る標準的なカリキュラム」を検討した。

### 2. 方法

養成施設が特定給食施設に「校外実習」を依頼する際、実習の内容として『何を』、『どのように』

教育・指導してほしいと考え、『どのような方法で』依頼しているのか、また、実習施設が養成施設からの要望を受け、『どのように教育・指導を実施しているのか』などについて、実態を把握するための一次調査（5 カテゴリー、23 項目）を実施した。一次調査の結果から、養成施設が実施を希望している教育・指導の内容が、実習施設において十分に実施されていない実態が明らかになったことから、実習施設における「給食の運営」に関わる校外実習で取り扱っている教育・指導の内容について、考えや実施の状況を確認するための二次調査（4 カテゴリー、13 項目）を実施した。

なお、本研究は、「和洋女子大学 ヒトを対象にする調査研究 生物学的研究・疫学的研究に関する倫理委員会」の承認を得ている（第 1407 号）。

### 3. 結果と考察

養成施設が臨地・校外実習を実習施設に依頼する際、「項目をあげて依頼している」養成施設は、11 施設中 9 施設であった。「項目をあげずに施設に任せている」養成施設の理由には、教育・指導項目を具体的に明示することで実習施設に負担感を抱かせ、「学生の受け入れを断られる場合がある」があげられていた。実習施設により業務の内容や人員配置などの状況が異なるなかで、希望どおりの実習施設でなくても、いかに実習施設を確保するかを優先させて臨地・校外実習の依頼を行っている状況が窺われた。

具体的な項目をあげて依頼しているすべての養成施設が依頼しているのは、「施設の調理システムと大量調理の特性」の 1 項目のみであった。調査票に掲載した 23 項目以外で取り上げられていた「給食の運営」に関する教育・指導の内容とし



て養成施設から実習施設に依頼している項目には、実習施設の組織や配置人員、経営形態など「実習施設の概況」に関する依頼が認められた。さらに、学生に「実習施設の概況」を理解させようとして、給食施設・設備のレイアウト及び人と物の動線などが利用者サービスに与える影響などを、実習施設での作業を体験することによって「給食の運営」の実際を認識させようとする取り組みも確認された。

すべての養成施設が依頼している教育・指導の内容である「施設の調理システムと大量調理の特性」は、実習施設 2 施設が「特に指導していない」と回答していた。養成施設のうち 7 施設以上が項目をあげて依頼している 13 項目の教育・指導の内容については、すべての実習施設が管理栄養士・栄養士の教育・養成で「必要である」と考えているものの実施状況からは、複数の項目が実施されていないなど十分な教育・指導内容となっていない実態が浮かび上がった。栄養・食事管理に不可欠な「利用者の性・年齢等の情報の把握」及び「給与栄養目標量の設定」を『実施していない』理由として、実習施設の受け入れ先が受託給食会社であるために、委託側から利用者の栄養・食事管理に必要な個人情報の入手が困難であることがあげられていた。

回答を寄せた養成施設や実習施設においては、欠くことができないと考えて設定した 23 項目に

表 1 「給食の運営」に係る標準的なカリキュラム

カテゴリー	教育・指導の内容
リー	(施設の概況を理解した上で、実際の業務を体験する。)
1. 運営管理	施設の概況(経営形態・組織等を含む)
2. 栄養・食事管理	利用者の性・年齢等情報の把握 給与栄養目標量の設定 献立作成基準(食事・提供形態を含む)の設定 献立作成(サイクルメニュー、季節・行事食等) 食数の把握・管理 レシピに基づく調理作業指示 栄養情報・教材の作成・提供 栄養管理報告書等の作成・活用 摂取量調査、嗜好調査の実施・活用
3. 調理・作業管理	給食原価 食材料管理(発注・検収・保管、在庫管理等) 食材納入業者(選定や契約方法等) 施設の調理システムと大量調理の特性 レシピの標準化への取り組み 「大量調理施設衛生管理マニュアル」の運用 利用者と給食従事者の安全・衛生管理と教育 アクシデント・インシデント管理・運用 災害時対応マニュアル等の整備及び訓練
4. 施設・設備等の管理	施設・設備及び食器・什器(整備・清掃・補充等) 施設・設備のレイアウト(従業員・食品・利用者の動線含む)
5. 情報管理	PCを活用した給食管理(献立・食数・発注等の管理)
6. 評価	検食及びその活用 残菜・残食の把握とその活用 給食委員会の運営

ついて臨地・校外実習の教育・指導の内容として取り扱われていない項目があること、また、23 項目以外について教育・指導が行われている項目があることが確認できた。これら調査結果とともに、栄養士法施行規則や厚生労働省健康局長通知による「給食の運営」に必要な「教育目標」を念頭に、実習施設の負担等も考慮し、実現が可能で最低限必要と思われる項目に限定して、『「給食の運営」に係る標準的なカリキュラム』を作成した(表 1)。

#### 4. まとめと今後の課題

このカリキュラムは、今後養成施設が実施する臨地・校外実習において、管理栄養士・栄養士を目指す学生が共通して修得すべき基礎的な内容を取りまとめたものである。臨地・校外実習に臨む学生が「給食の運営」に必要なスキルを修得するためには、この標準的なカリキュラムに示す教育・指導の内容を理解し、臨地・校外実習に臨むことが望まれる。また、養成施設と実習施設は、「健康日本21(第二次)」に掲げられている特定給食施設に関わる目標などについて十分に意思の疎通を図り、認識を共通にしたうえで『標準的なカリキュラム』を参考にして臨地・校外実習を企画・実施することが重要である。さらに、臨地・校外実習を依頼する養成施設においては、実習ノート等の教育教材を活用することなどによって学生が、より積極的な姿勢で実習施設における教育・指導に臨めるようにするための方策が検討されなければならないと考える。

また、『「給食の運営」に係る標準的なカリキュラム』は、多くの養成施設並びに実習施設の関係者から問題点の指摘や意見をいただくなどして、より良いカリキュラムにブラッシュアップさせていく必要がある。そのためには、養成施設や実習施設において「給食の運営」に関わっている管理栄養士・栄養士等によって組織されている日本給食経営管理学会などの場で開示し、広く活用していただけるカリキュラムに発展させるように努力したいと考えている。

#### 主要参考文献

- [1] 文部科学省高等教育局長, 厚生労働省健康局長. 管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習について. 平成 14 年 4 月 1 日
- [2] (社)日本栄養士会, (社)全国栄養士養成施設協会. 臨地実習及び校外実習の実際(2002 年版), 2002